

第7図 調査区位置図一南東部一 () 内は調査次数

した。

第2次5カ年計画(註5)はⅡ期官衙の政府と寺域(郡山庵寺)のさらなる解明のために実施された。6年次の第56次調査では方四町Ⅱ期官衙の南門を発見し、10年次の第83次調査では正殿と考えられる四面廂付建物跡と方形の石組池跡が発見された。方形の石組池は石神遺跡(奈良県明日香村)などの飛鳥地方の宮殿やその周辺から発見されているのみで、遺跡の性格を考えるのにきわめて重要な発見となった。郡山庵寺については7年次の第62次調査で伽藍の北辺に当たる材木列と、それに取り付く小規模な八脚門を発見した。第63次調査でも僧房と考えられる建物跡

が発見され、遺構配置や軒丸瓦の文様から多賀城廃寺との類似性が指摘されるようになった。またⅠ期官衙についても方四町Ⅱ期官衙の中枢部分と重複して、9年次の第77次調査や10年次の第83次調査においてⅠ期官衙の中枢部を構成する板塀や建物跡が発見された。

第2次5ヵ年計画の実施期間中から次の第3次5ヵ年計画にかけて、昭和61年から62年、平成元年から2年の2回に渡り、遺跡南東部の郡山中学校の校舎ならびに体育館の建替えに伴う第65次調査を実施した。これは国庫補助事業による調査とは別に並行して実施したものであるが、調査面積が6,600m²および、Ⅱ期官衙を構成する重要な遺構群(「寺院東方建物群」、「南方官衙」)の発見に繋がった。

第3次5ヵ年計画では前半の11~13年次までが、同じ国庫補助事業の中で山田条里遺跡(太白区鉢取)と郡山遺跡の西隣接地(長町貨物ヤード跡地)での調査を実施した。また14年次から仙台市北部に位置する燕沢遺跡において性格究明のための発掘調査を実施した。これにより郡山遺跡内の調査地点と面積がこの期間に限り減少している。この頃は長町貨物ヤード跡地と郡山遺跡西部で再開発の計画が検討されていた時期で、開発予定地内に括がっていると想定されるⅠ期官衙南西部と、その周囲の状況を早急に把握する必要があった。13年次に第96次調査と14年次に第99次、100次調査、15年次に第103次、104次調査を実施し、Ⅰ期官衙の南、西辺を確認した。これらの遺構と重複して、Ⅱ期官衙の倉庫風の建物群も発見され、「寺院西方建物群」としてこの後に扱っている。また長町貨物ヤード跡地においても(巻頭図版1参照)、多數の堅穴住居跡を発見し、「長町駅東遺跡」として登録した。このような対応の中で方四町Ⅱ期官衙内の政府の詳細については、不明なままとなり課題として残った。

したがってⅡ期官衙の実態をさらに明らかにすることを目的とし第4次5ヵ年計画を実施した。16年次と17年次は調査を促進するため、国庫補助事業の「緊急範囲確認調査」の他に「遺跡発掘事前総合調査」を加えて実施している。17年次の第110次調査、18年次の第115次、116次調査で方四町Ⅱ期官衙内部の東西に官衙の中軸線を挟んで、南北棟の建物が複数並び立つ様相が明らかになってきた。さらに遺構は真北方向のⅡ-A期とやや西に偏るⅡ-B期があり、Ⅱ-B期の建物の増加により官衙終末には整然とした建物配置の規則性が失われて行く事が明瞭となっている。またⅡ期官衙の遺構と重複しⅠ期官衙中枢部の建物や堀跡があり、19年次の第122次調査では中枢部短辺の中央で板塀に取り付くように門跡を発見した。郡山廃寺では不明であった範囲を確認するために、19年次に第119次、第120次調査を、20年次に第126次、第128次調査を実施し、南辺、東辺を確認した。特に第128次調査では八脚門を検出している。

第4次5ヵ年計画では方四町Ⅱ期官衙内部の様相や、Ⅰ期官衙中枢部と廃寺の範囲などで、これまでより成果を挙げたが、南方官衙や廃寺内部の詳細については課題を残した。

第5次5ヵ年計画では、まず南方官衙地区で21年次に第135次調査、22年次に第138次調査を実施した。二面廟や三面廟付建物跡が発見され、これまでの南方官衙地区で発見されている建物跡と同様に規模の大きな建物跡が存在することが明らかとなった。これらの建物の北には方四町Ⅱ期官衙外郭大溝と同じような溝跡(外溝)も平行していた。なおこれらの遺構と重複してⅠ期官衙の東辺となる材木列、溝跡も発見されている。24年次にあたる第147次調査と第152次調査においても、このⅠ期官衙の東辺に視点を当てた調査を実施している。郡山廃寺については23年次に御藍内南部において第146次調査を実施したが、創建期の主要な遺構は発見されなかった。

このように昭和54年の民間の開発に伴って、初めての発掘調査がされてから25年が経過した。国庫補助により本格的な発掘調査が継続されてからでも25年目を終えようとしている。今から四半世紀前までは存在もおぼろげであった遺跡が60haにも広がっていることや、7世紀に遡る役所跡や寺院跡であること、石組池や畿内土器類の出土により中央と直接的な関連を持つべき重要な遺跡であることが明らかになりつつある。

平成10年から西に隣接する長町駅東遺跡周辺では、長町副都心土地区画整理事業が始まり発掘調査が行われている。長町駅東遺跡では、これまで総数260軒ほどの堅穴住居跡が発見されている。平成15、16年度の調査では集落

の区画施設と考えられる通路状遺構を伴う大溝跡1条、材木列1列、一本柱列4列も発見されている。隣接する西台畠遺跡の調査においても、総数100軒ほどの堅穴住居跡や方四町Ⅱ期官衙外郭大溝に並行する外溝跡が発見されている。

長町駅東遺跡、西台畠遺跡の堅穴住居跡の存在から、郡山遺跡の西側一帯に官衙の成立や造営、維持に関った人々の集落が広がっていたことが明らかになってきている。また出土遺物の中にはいわゆる関東系土師器と呼ばれる土器があり、集落に関東地方からの人的、物的交流のあったことが想定されるにいたっている。

このような中で郡山遺跡内では、発掘調査開始頃に比べ農地が急激に減少し、アパートや戸建住宅の建築が進んでいる。仙台市南部の中心となる長町にも近いため、新たな住民も日に日に増えつつある現状である。現地において遺跡の情報を伝達し普及させることや、将来にむけて遺跡を保存し整備することが必要である。

第2節 本書の構成と見方

本書は郡山遺跡発掘調査報告書—総括編(1)—である。これまでの郡山遺跡内での発掘調査成果を集約し、遺跡の大要を一冊に網羅することを目的としている。よって全ての遺構、遺物について記載の対象とせず、ここでは遺跡を構成する主要な遺構や遺物について記述している。本報告書の刊行されているもの(註6)については、必要に応じ取り上げたが詳細はそれぞれの本報告書を参照していただきたい。また遺構の記載中に表や模式図のみのものや、文章中にこれまでに発行された年度概報番号が記されている場合は、そちらを合わせて参照していただきたい。

発掘調査は昭和55年度に設置し、56年ならびに平成8年度に改訂した任意の座標系により、調査区や遺構の位置を表記している。昭和55年当時に遺跡内のはば中央と考えられた郡山三丁目地内に基準点No.1(X=0、Y=0)を設定し、磁北を基準として座標を設けている。これにより遺跡北部はXがプラス、南部がマイナス、東部はYがプラス、西部がマイナスとなり、それらをXのプラス域をN、マイナス域をSに、Yのプラス域をE、マイナス域をWに変換して図中に記入している。なお測量における位置については国家座標や、近年は国際座標への変換が求められているが、当遺跡の調査が以前より任意座標に基づくため、調査区や遺構間の配置の把握を重視したため、任意座標を用いている。

調査次数は国庫補助事業による発掘調査が始められて以降、順次付けられたものである。昭和55年度の第1次調査から平成16年度の第165次調査まで実施されている。本書の文中に次数の記載のあるものは、この調査次数である。なお昭和54年度に実施した初めての発掘調査のみ「昭和54年度調査」と記載している。

本書の中での遺構の記載は、第5章中の2時期の官衙と寺院、さらにそれ以前の遺構として所属する時期ごとに行っている。同一調査区内の遺構であっても、所属する時期ごとに記載されている箇所が異なる。また官衙に関する図の掲載は原則として造営基準方向を上にしている。よって同一調査区内の遺構でも所属する官衙の時期が違えば、掲載された図の方向が異なることになる。

調査 次数	年 度	発掘調査地区	主な発見遺構		掲 載 報 告 書
			I 期	II 期	
昭55年	1979年	S54 蓮根隣接地(郡山三丁目遺跡、北片城跡)			年報1(仙台市文化財調査報告書第23集)
1次	1980年	S55 推定外郭南北西地区		SI1	郡山I(仙台市文化財調査報告書第29集)
2次	1980年	S55 推定外郭内中央区	SB14		郡山I(仙台市文化財調査報告書第29集)
3次	1980年	S55 推定外郭内中央区		SB1635	郡山I(仙台市文化財調査報告書第29集)
4次	1980年	S55 外郭線南辺	SK46	SA33、SD35	郡山T(仙台市文化財調査報告書第29集)
5次	1980年	S55 推定外郭内南北西区			郡山I(仙台市文化財調査報告書第29集)
6次	1980年	S55 推定外郭南北西区			郡山I(仙台市文化財調査報告書第29集)
7次	1980年	S55 外郭線南北コーナー	SD35、SB51、SA65		郡山I(仙台市文化財調査報告書第29集)
8次	1980年	S55 外郭線南辺	SA33、SD35		郡山I(仙台市文化財調査報告書第29集)
9次	1980年	S55 外郭線南辺	SA33、SD35		郡山I(仙台市文化財調査報告書第29集)
10次	1981年	S56 推定付属寺院跡南端地区			郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
11次	1981年	S56 推定外郭線東辺地区	SD73、SA74		郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
12次	1981年	S56 推定付属寺院跡中央地区	SB103、SD124		郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
13次	1981年	S56 推定付属寺院跡西部地区	SA103、SA104		郡山II-38K-(仙台市文化財調査報告書第38集)
14次	1981年	S56 推定外郭線北辺地区			郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
15次	1981年	S56 推定付属寺院跡東端地区	SI143、SE157、SA177		郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
16次	1981年	S56 推定外郭線西辺地区	SB134		郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
17次	1981年	S56 推定外郭線東辺地区			郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
18次	1981年	S56 外郭線東辺地区			郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
19次	1981年	S56 推定方四町北東地区	SI79		郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
20次	1981年	S56 推定方四町南東地区			郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)
21次	1981年	S56 推定方四町外郭北地区			郡山II(仙台市文化財調査報告書第38集)

第2表 郡山遺跡調査地区掲載報告書一覧(1)

調査 次数	年 度	発掘調査地区	主な発見遺構		掲載報告書
			I期	II期	
23次	1982年	S57 推定方四町外郭南北地区			郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
24次	1982年	S57 推定方四町中央北地区	SI261, SB344, SI377	SI289, SX376	郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
			その他	SI260, SI290	
25次	1982年	S57 推定方二町寺城中央西地区			郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
26次	1982年	S57 推定方四町外郭北辺地区			郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
27次	1982年	S57 推定方四町西外地區			郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
28次	1982年	S57 推定方二町寺城西外地區	SA272		郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
29次	1982年	S57 推定方二町寺城中央地区			郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
30次	1982年	S57 推定方四町北地区			郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
31次	1982年	S57 推定方四町中央北地区	SB344		郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
32次	1982年	S57 推定方四町外郭東外地區			郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
33次	1982年	S57 推定方二町寺城北辺地区			郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
34次	1982年	S57 推定方二町寺城東外地區			郡山Ⅲ(仙台市文化財調査報告書第46集)
35次	1983年	S58 推定方四町中央北地区	SK394, SI412	SD385, SA386, SI390, SE429	郡山Ⅳ(仙台市文化財調査報告書第64集)
36次	1983年	S58 推定方二町寺城外南地区			郡山Ⅳ(仙台市文化財調査報告書第64集)
37次	1983年	S58 推定方四町北西地区			郡山Ⅳ(仙台市文化財調査報告書第64集)
38次	1983年	S58 推定方二町寺城南東地区		SI462	郡山Ⅳ(仙台市文化財調査報告書第64集)
39次	1983年	S58 推定方二町寺城外南地区			郡山Ⅳ(仙台市文化財調査報告書第64集)
40次	1983年	S58 推定方四町中央地区			郡山Ⅳ(仙台市文化財調査報告書第64集)
41次	1983年	S58 推定方四町外南東地区		SD476	郡山Ⅳ(仙台市文化財調査報告書第64集)
42次	1983年	S58 推定方四町南辺南北地区		SA33, SD35	郡山Ⅳ(仙台市文化財調査報告書第64集)
43次	1984年	S59 推定方四町官衙外郭南辺	SK489	SA33, SD35	郡山V(仙台市文化財調査報告書第74集)
44次	1984年	S59 推定方四町官衙南地区	SB507, SI549, SD536, SD552	SB526	郡山V(仙台市文化財調査報告書第74集)
45次	1984年	S59 推定方四町官衙南外地区			郡山V(仙台市文化財調査報告書第74集)
46次	1984年	S59 推定方二町寺城中央地区		SD532, SD562	郡山V(仙台市文化財調査報告書第74集)
47次	1984年	S59 推定方四町官衙外郭西辺		SD35	郡山V(仙台市文化財調査報告書第74集)
48次	1984年	S59 推定方四町官衙中央南地区	SK579, SB597, SI600, SI601, SI606		郡山V(仙台市文化財調査報告書第74集)
49次	1984年	S59 推定方四町官衙西・北地区			郡山V(仙台市文化財調査報告書第74集)
50次	1985年	S60 II期官衙外郭北部地区			郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
51次	1985年	S60 II期官衙推定政庁中央地区	SA651	SB638, SB699	郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
52次	1985年	S60 II期官衙外南東地区			郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
53次	1985年	S60 II期官衙中央南地区			郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
54次	1985年	S60 II期官衙推定政庁北東地区			郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
55次	1985年	S60 II期官衙推定政庁南西地区		SB716	郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
56次	1985年	S60 II期官衙外郭南門地区		SA33, SB712, SD713	郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
57次	1985年	S60 II期官衙推定政庁東辺地区			郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
58次	1985年	S60 推定方二町寺城南地区			郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
59次	1985年	S60 II期官衙外郭北辺地区			郡山VI(仙台市文化財調査報告書第86集)
60次	1986年	S61 II期官衙中央地区			郡山V(仙台市文化財調査報告書第96集)
61次	1986年	S61 II期官衙中央北地区			郡山V(仙台市文化財調査報告書第96集)
62次	1986年	S61 寺城北西地区		SB834	郡山V(仙台市文化財調査報告書第96集)
63次	1986年	S61 寺城中央地区		SK851, SB890	郡山V(仙台市文化財調査報告書第96集)
64次	1986年	S61 遺跡南端			年報8(仙台市文化財調査報告書第107集)
65次	1986 ~ 91年	S61 寺城東方地区	SB1191, SI1303, SB1306, SB1320, SB1321, SI947, SB48, SB54, SB65, SB996, SH121, SK1128, SB1129		郡山V(仙台市文化財調査報告書第106集)
66次	1986年	S61 寺城中央地区	SD1008		郡山V(仙台市文化財調査報告書第96集)
67次	1986年	S61 II期官衙東外地区			郡山V(仙台市文化財調査報告書第96集)
68次	1987年	S62 II期官衙中央北地区	SI1018, SI1019		郡山V(仙台市文化財調査報告書第110集)
69次	1987年	S62 II期官衙外郭北辺			郡山V(仙台市文化財調査報告書第110集)
70次	1987年	S62 廟寺南西地区		SI1031, SA1066	郡山V(仙台市文化財調査報告書第110集)
71次	1987年	S62 II期中央地区	SB14		郡山V(仙台市文化財調査報告書第110集)

第2表 郡山遺跡調査地区掲載報告書一覧 (2)

調査 次数	年 度	発掘調査地区	主な発見遺構		掲 載 報 告 書
			I 期	II 期	
72次	1987年	S62	Ⅱ期官衙中央東地区		郡山陣（仙台市文化財調査報告書第110集）
73次	1987年	S62	遺跡隣接地（北日城跡）		仙台平野の遺跡群（仙台市文化財調査報告書第111集）
74次	1987年	S62	Ⅱ期官衙外郭南辺	SA33	郡山陣（仙台市文化財調査報告書第110集）
75次	1988年	S63	Ⅱ期官衙外東南地区		郡山区（仙台市文化財調査報告書第124集）
76次	1988年	S63	推定方二町庵寺跡西地区		郡山区（仙台市文化財調査報告書第124集）
77次	1988年	S63	Ⅱ期官衙中央地区	SB14、SB1100	郡山区（仙台市文化財調査報告書第124集）
78次	1988年	S63	Ⅱ期官衙中央地区		郡山区（仙台市文化財調査報告書第124集）
79次	1988年	S63	Ⅱ期官衙外郭北辺地区	SD617	郡山区（仙台市文化財調査報告書第124集）
80次	1988年	S63	Ⅱ期官衙外郭東辺地区		郡山区（仙台市文化財調査報告書第124集）
81次	1988年	S63	推定方二町庵寺跡西地区		郡山区（仙台市文化財調査報告書第124集）
82次	1988年	S63	Ⅱ期官衙北西地区		郡山区（仙台市文化財調査報告書第124集）
83次	1989年	H1	Ⅱ期官衙中央地区	SX326、SD127、SU123、 SX125、SD126、SX124、 SD129、SB120、SX125、 SX24	郡山X（仙台市文化財調査報告書第133集）
84次	1990~91年	H1~2	郡山庵寺北方地区		郡山 - 第84・85次（仙台市文化財調査報告書第145集）
85次	1990~91年	H1~2	Ⅱ期官衙南方地区	SD35、SB1277	郡山 - 第84・85次（仙台市文化財調査報告書第145集）
86次	1990年	H2	Ⅱ期官衙中央北地区		郡山XII（仙台市文化財調査報告書第146集）
87次	1990年	H2	Ⅱ期官衙中央北地区	その他 SH1299	郡山XII（仙台市文化財調査報告書第146集）
88次	1990年	H2	Ⅱ期官衙中央北地区		郡山XII（仙台市文化財調査報告書第146集）
89次	1990年	H2	Ⅱ期官衙外郭南外地区		郡山XII（仙台市文化財調査報告書第146集）
90次	1991年	H3	Ⅱ期官衙北地区		郡山XII（仙台市文化財調査報告書第161集）
91次	1991年	H3	Ⅱ期官衙東南地区		郡山XII（仙台市文化財調査報告書第161集）
92次	1991年	H3	Ⅱ期官衙東南地区		郡山XII（仙台市文化財調査報告書第161集）
93次	1991年	H3	南方官衙西地区		年報13（仙台市文化財調査報告書第167集）
94次	1992~3年	H1~5	南方官衙東地区		郡山 - 第94次（仙台市文化財調査報告書第177集）
95次	1992年	H4	Ⅱ期官衙外郭北辺地区	SD476	郡山XIII（仙台市文化財調査報告書第169集）
96次	1992年	H4	I期官衙南北西地区	SA272、SA1380 その他の西造構SD1367、SD1372	郡山XIII（仙台市文化財調査報告書第169集）
97次	1992年	H4	Ⅱ期官衙外郭南辺地区		郡山XIII（仙台市文化財調査報告書第169集）
98次	1993年	H5	Ⅱ期官衙中央地区	SI1389	郡山XIV（仙台市文化財調査報告書第178集）
99次	1993年	H5	I期官衙南北地区	SD1394	郡山XIV（仙台市文化財調査報告書第178集）
100次	1993年	H5	I期官衙南部地区	SA272	郡山XIV（仙台市文化財調査報告書第178集）
101次	1994~	H6~	Ⅱ期官衙中央地区	SA33、SD35 SB1490	報告書未刊行（市道拡幅工事）
102次	1994年	H6	Ⅱ期官衙中央地区	その他 SI1495	郡山XV（仙台市文化財調査報告書第194集）
103次	1994年	H6	I期官衙西部地区	SI1475、SD1492	郡山XV（仙台市文化財調査報告書第194集）
104次	1994年	H6	I期官衙西部地区	SD1394、SA1430	郡山XV（仙台市文化財調査報告書第194集）
105次	1994年	H6	Ⅱ期官衙東辺地区		郡山XV（仙台市文化財調査報告書第194集）
106次	1994~	H6~	郡山庵寺東方地区		報告書未刊行（市道拡幅工事）
107次	1995年	H7	Ⅱ期官衙中央地区	SB1610、SA1615、 SA1620、SB1625 SB1545、SB1555、SB1560、 SB1570、SD1600、SX1616、 SB1635	郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第210集）
108次	1995年	H7	I期官衙地区		郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第210集）
109次	1995年	H7	郡山庵寺南地区		郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第210集）
110次	1996年	H8	Ⅱ期官衙中央地区		郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第215集）
111次	1996年	H8	Ⅱ期官衙中央地区	SB1250	郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第215集）
112次	1996年	H8	遺跡西方地区		郡山 - 第112次（仙台市文化財調査報告書第215集）
113次	1996年	H8	郡山庵寺東地区		郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第215集）
114次	1996年	H8	Ⅱ期官衙中央東地区		郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第215集）
115次	1997年	H9	Ⅱ期官衙中央地区	SB1680	郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第227集）
116次	1997年	H9	Ⅱ期官衙中央地区	SB526	郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第227集）
117次	1998年	H10	方四町Ⅱ期官衙南東部		郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第234集）
118次	1998年	H10	南方官衙西地区		郡山XVI（仙台市文化財調査報告書第234集）

第2表 郡山遺跡調査地区掲載報告書一覧 (3)

調査 次数	年 度	発掘調査地区	主な発見遺構		掲載報告書
			I 期	II 期	
119次	1998年	H10 郡山廃寺北辺、東辺		SA177、SA1775	郡山XIX（仙台市文化財調査報告書第234集）
120次	1998年	H10 郡山廃寺東辺、南辺			郡山XIX（仙台市文化財調査報告書第234集）
121次	1998年	H10 方四町Ⅱ期官衙中権部南端		SA33、SD35	郡山XIX（仙台市文化財調査報告書第234集）
122次	1998年	H10 方四町Ⅱ期官衙中権部南端、Ⅰ期官衙中権部	SA1740、SB1795		郡山XIX（仙台市文化財調査報告書第234集）
123次	1998年	H10 I期官衙南部			郡山XX（仙台市文化財調査報告書第244集）
124次	1998年	H10 I期官衙南部			郡山XX（仙台市文化財調査報告書第244集）
125次	1999年	H11 I期官衙西南部			郡山XX（仙台市文化財調査報告書第244集）
126次	1999年	H11 郡山廃寺東辺、南辺部			郡山XX（仙台市文化財調査報告書第244集）
127次	1999年	H11 方四町Ⅱ期官衙中権部			郡山XX（仙台市文化財調査報告書第244集）
128次	1999年	H11 郡山廃寺南辺部	SA1850、SB1880		郡山XX（仙台市文化財調査報告書第244集）
129次	1999年	H11 方四町Ⅱ期官衙外郭西辺			郡山XX（仙台市文化財調査報告書第244集）
130次	1999年	H11 I期官衙南部			郡山XX（仙台市文化財調査報告書第244集）
131次	1999年	H11 II期官衙東部、I期官衙			郡山XX（仙台市文化財調査報告書第244集）
132次	2000年	H12 郡山廃寺南西部	SA1850		郡山21（仙台市文化財調査報告書第250集）
133次	2000年	H12 郡山廃寺南東部	SA1850		郡山21（仙台市文化財調査報告書第250集）
134次	2000年	H12 方四町Ⅱ期官衙南東部			郡山21（仙台市文化財調査報告書第250集）
135次	2000年	H12 I期官衙東辺	SA1855、SA1910、SD1957、SD1958		郡山21（仙台市文化財調査報告書第250集）
136次	2000年	H12 遺跡南西部			郡山21（仙台市文化財調査報告書第250集）
137次	2000年	H12 南方官衙東地区			郡山21（仙台市文化財調査報告書第250集）
138次	2001年	H13 南方官衙西地区	SA1855、SA1910、SA1995、SA2005	SD2000、SB2010、SB2015	郡山22（仙台市文化財調査報告書第258集）
139次	2001年	H13 郡山廃寺東隣接地			小鶴城跡ほか（仙台市文化財調査報告書第261集）
140次	2001年	H13 方四町Ⅱ期官衙中権部東			郡山22（仙台市文化財調査報告書第258集）
141次	2001年	H13 寺院東方建物群東			小鶴城跡ほか（仙台市文化財調査報告書第261集）
142次	2001年	H13 II期官衙中権部東	SI1975		郡山22（仙台市文化財調査報告書第258集）
143次	2001年	H13 方四町Ⅱ期官衙東隣接地			郡山22（仙台市文化財調査報告書第258集）
144次	2001年	H13 I期官衙西方			未刊（長町郷土地区面整理事業開闢）
145次	2002年	H14 遺跡内東部			郡山23（仙台市文化財調査報告書第263集）
146次	2002年	H14 郡山廃寺南部	SA1850、SB2025		郡山23（仙台市文化財調査報告書第263集）
147次	2002年	H14 南方官衙西地区（平成15年度含む）	その他 SK2053		郡山23（仙台市文化財調査報告書第263集）
148次	2002年	H14 方四町Ⅱ期官衙北辺	SA1855、SA2005	SD2000	郡山23（仙台市文化財調査報告書第263集）
149次	2002年	H14 遺跡内東部	SA616		年報24（仙台市文化財調査報告書第267集）
150次	2002年	H14 遺跡内南部			郡山23（仙台市文化財調査報告書第263集）
151次	2002年	H14 方四町Ⅱ期官衙南西コーナー	SB51		郡山23（仙台市文化財調査報告書第263集）
147次	2003年	H15 南方官衙西地区、I期官衙東辺 (平成14年度追加調査)	SA1855、SA2005、 SV2093	SA1283、SB2045	郡山24（仙台市文化財調査報告書第269集）
152次	2003年	H15 I期官衙東辺	SA2065、SA2066、SA2065		郡山24（仙台市文化財調査報告書第269集）
153次	2003年	H15 遺跡内南部			郡山24（仙台市文化財調査報告書第269集）
154次	2003年	H15 郡山廃寺西辺			郡山24（仙台市文化財調査報告書第269集）
155次	2003年	H15 方四町Ⅱ期官衙内南西部			郡山24（仙台市文化財調査報告書第269集）
156次	2003年	H15 方四町Ⅱ期官衙内北部			郡山24（仙台市文化財調査報告書第269集）
157次	2003年	H15 方二町推定寺域西辺			郡山24（仙台市文化財調査報告書第269集）
158次	2004年	H16 I期官衙中権部南東側			郡山25（仙台市文化財調査報告書第284集）
159次	2004年	H16 南東官衙西地区			郡山25（仙台市文化財調査報告書第284集）
160次	2004年	H16 方四町Ⅱ期官衙内北東部			郡山25（仙台市文化財調査報告書第284集）
161次	2004年	H16 南方官衙西地区			郡山25（仙台市文化財調査報告書第284集）
162次	2004年	方四町Ⅱ期官衙内東部 (1区 宅地造成に伴う事前調査) 2区 観測確認調査		SB2115	1区 郡山-162次- (仙台市文化財調査報告書第288集)
					2区 郡山25 (仙台市文化財調査報告書第284集)
163次	2004年	H16 方四町Ⅱ期官衙内北部			郡山25（仙台市文化財調査報告書第284集）
164次	2004年	H16 郡山廃寺西辺			郡山-164次-（仙台市文化財調査報告書第288集）
165次	2004年	H16 方四町Ⅱ期官衙内東部			郡山25（仙台市文化財調査報告書第284集）

第2表 郡山遺跡調査地区掲載報告書一覧 (4)



第8図 郡山遺跡測量座標

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

1. 郡山遺跡の位置

郡山遺跡は宮城県の中央に所在する仙台市の南東部、太白区郡山二丁目から同六丁目にかけて広がる遺跡である。遺跡の範囲は東西800m、南北900mの約60万m²に及んでいる。遺跡は東北本線と国道4号線バイパスに挟まれた位置にあり、さらに北へ300mで東西に広瀬川が流れ(総括編(2)図版1)、南へ1kmで東西に名取川が流れ(総括編(2)図版2)ている。この両河川は遺跡から南東へ1.5kmで合流している。この合流点から名取川の河口までは6kmで、仙台平野のはば中心に位置し、仙台湾の海岸線から奥羽山系まで最短距離のライン上にある。

2. 郡山遺跡の地理的環境

仙台市中心部の地形は、西半部と東半部で大きく異なっている。西半部は奥羽山脈から派生する七北田丘陵、青葉山丘陵、高館丘陵と名取川の支流である広瀬川が形成した段丘地形からなっている。段丘は古期から青葉山段丘、台ノ原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘と呼ばれている。仙台市の市街地は、このうち台ノ原段丘から下町段丘にかけて江戸時代以降に形成されてきた。

東半部は海岸より幅10km程の「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野である。北は宮城郡七ヶ浜町から、南は亘理郡山元町までの長さ40km程の三日月形に広がっている。この平野は七北田川、名取川、阿武隈川の堆積物によって形成され、流域には扇状地、自然堤防、後背湿地、旧河道などの地形が複雑に入り組んでいる。また現在の海岸線から奥へ4から5列の浜堤が形成されている。沖積平野上の標高は5m以下が大部分であるが、広瀬川や名取川の扇状地や内陸では10mから15mに達しているところもある。

郡山遺跡の立地するのは、北東を広瀬川、南を名取川、西を長町一利府構造線によって画されている郡山低地の中央やや東よりで、標高8mから11mの自然堤防と後背湿地にある。遺跡内には数条の旧河道が観察されるが、遺跡南端を通り地表に1mから1.5m程の段差を示す旧河道は顕著である。また近年の発掘調査において、郡山遺跡の北西部に古代に遡る河川跡が発見されている(註7)。

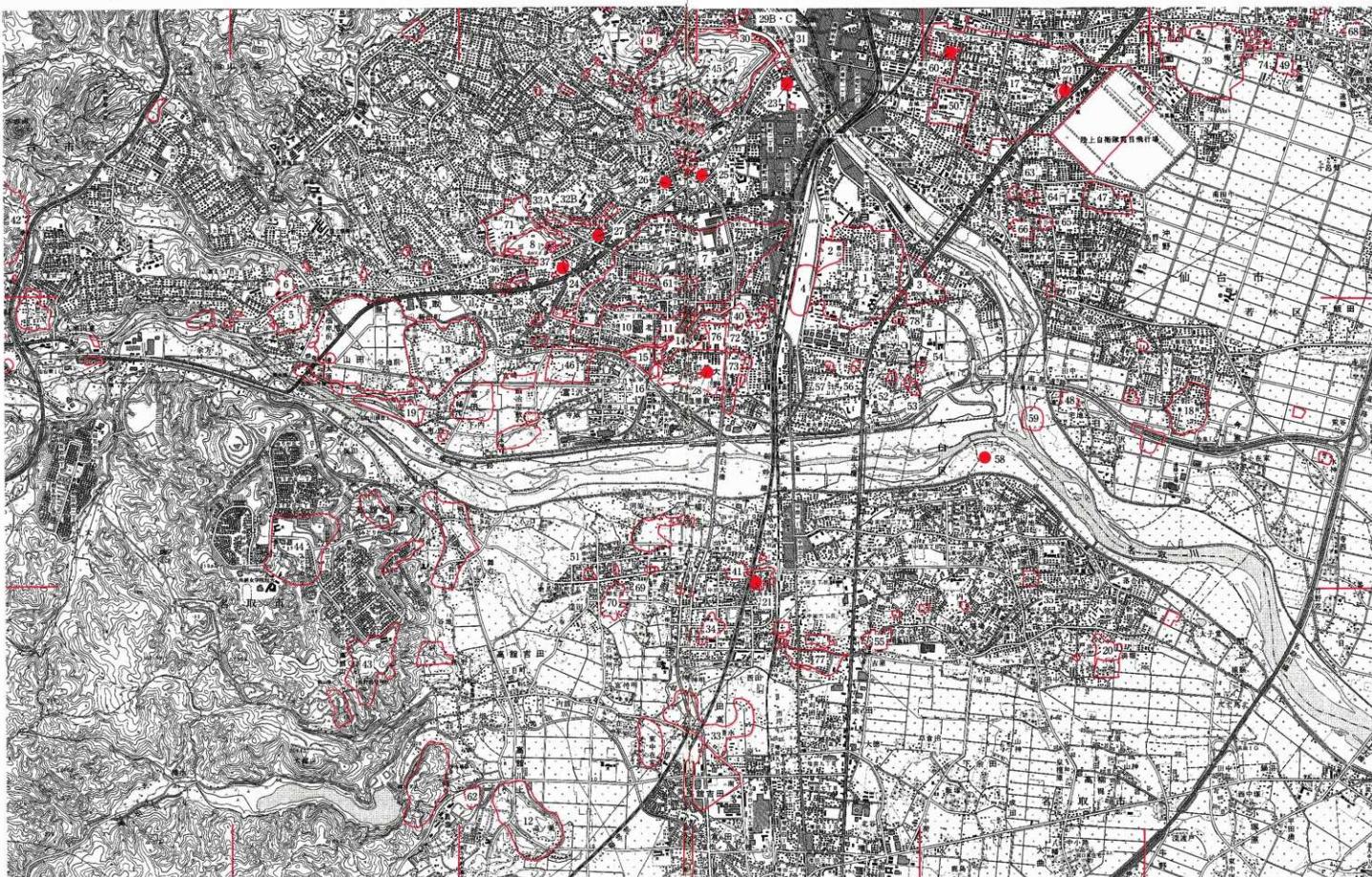
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

仙台市南部の太白区は名取川の両岸や青葉山丘陵の先端に当たる向山、土手内の丘陵部にかけて、多くの遺跡がある。昭和20年代頃までは長町や中田を交通や商業の中心として、周辺に農村の風景が広がっていた。水田の中に古墳が点在していたことを確認出来るのもこの頃までである。とりわけ丘陵部については昭和30年代以降に宅地開発が活発に行われ、住宅団地となって行った。また平野部でも昭和40年代後半から国道286号線のバイパス工事、50年代に入ってからの富沢地区での区画整理事業により、農地であったところが住宅地に一変してしまった。

このような中で昭和50年代後半以降は、街と農村部の変貌に追いつかれていたながら、各所の遺跡で発掘調査に暇がない状況であった。発掘調査の行われた遺跡は、多くが記録には残るが、地上からは姿を消していく。調査成果の蓄積や関連科学の進歩によって、当時は注視されなかった構造、遺物が、後の時代には重要なものとして扱われることがある。発掘調査件数の多さの裏には、後世に伝えるべき情報の減少という一面がある。これまで発掘調査された遺跡と、未調査ではあるが遺物の分布などから年代の推定される遺跡を含め、仙台平野南部の歴史的環境を概観してみる。なお近世以降については、文献資料や地図にもとづき現在に至る様子を略述する。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は名取川の流域では、山田上ノ台遺跡(5)、北前遺跡(6)、上ノ原山遺跡、川添東遺跡、富沢遺跡(7)、芦ノ口遺跡(71)などがある。山田上ノ台遺跡ではナイフ形石器を含む後期旧石器が321点出土し、始良Tn



第9図 周辺の遺跡 ●は古墳

B

C

E

F

(約1/34,000)

No.	遺跡名	種別	立地	年代	位置	No.	遺跡名	種別	立地	年代	位置
1	郡山遺跡	官衛・寺院	自然堤防 後背湿地	繩文・弥生 古墳・奈良 平安・中世	D1	39	仙台東郊条里跡	条里跡	後背湿地	奈良	F1
						40	元袋遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安	D2
						41	安久遺跡	集落跡	自然堤防	彌生・平安・中世	D2
2	西台畠遺跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳	D1	42	茂庭けんとう城跡	城館	丘陵	中世	A1
3	北日城跡	城館	自然堤防	中世	D1	43	高倉城跡	城館	丘陵	中世	B3
4	長町駅東道跡	集落跡	自然堤防 背景湿地	弥生～平安	D1	44	熊野堂大館跡	城館	丘陵	中世	B2
5	山田上ノ台道路	包含地・集落跡	段丘	旧石器・縄文 平安・近世	B2	45	茂ヶ崎城跡	城館	丘陵	中世	D1
6	北前遺跡	包含地・集落跡	段丘	旧石器・縄文 古墳・平安	B1	46	富沢館跡	城館	自然堤防	中世	C2
7	富沢遺跡	包含地・水田跡	後背湿地	旧石器・ 縄文・近世	D1	47	沖野城跡	城館	自然堤防	中世	E1
8	三神峯遺跡	集落跡	段丘	繩文	C1	48	日迢館跡	城館	自然堤防	中世	E2
9	萩ヶ丘遺跡	包含地	丘陵傾斜地	繩文・佐良・平安	C1	49	長喜城跡	城館	自然堤防	中世	F1
10	山口遺跡	包含地・水田跡	自然堤防	縄文・弥生 奈良・平安	C2	50	若林城跡	城館	自然堤防	中世・江戸	E1
11	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防	繩文～平安	C2	51	松木遺跡	集落跡	自然堤防	平安・中世	C2
12	今熊野遺跡	貝塚・集落跡	段丘	繩文～平安	C3	52	久ノ上I遺跡	水田跡	自然堤防	平安・中世	D2
13	上野遺跡	包含地	段丘	繩文・佐良・平安	B2	53	久ノ上II遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	D2
14	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	繩文～平安	C2	54	久ノ上III遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安	D2
15	下ノ内浦遺跡	集落跡	自然堤防	繩文～平安	C2	55	後河原遺跡	水田跡	自然堤防 後背湿地	弥生～近世	D3
16	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	繩文～平安	C2	56	笠ノ瀬遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	D2
17	南小京遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～中世	E1	57	の場遺跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安	D2
18	今泉遺跡	集落跡・城館	自然堤防	弥生・古墳 平安～近世	F2	58	大塚山古墳	円墳	自然堤防	古墳	E2
19	般渡前遺跡	集落跡	自然堤防	繩文・弥生 奈良・平安	B2	59	日迢遺跡	集落跡	河川敷	古墳(中期)	E2
20	戸ノ内道跡	集落跡	自然堤防	古墳・平安・中世	E3	60	猫塚古墳	円墳	自然堤防	古墳	E1
21	安久東遺跡	集落跡・古墳	自然堤防	弥生～近世	D2	61	泉嶺浦遺跡	包含地	自然堤防	繩文・佐良・平安	C1
22	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	E1	62	金剛寺貝塚	貝塚	段丘	繩文・弥生・平安	C3
23	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	D1	63	砂押I遺跡	包含地	自然堤防	古墳・佐良・平安	E1
24	裏町古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	C1	64	神櫛遺跡	包含地	自然堤防	繩文～平安	E1
25	一塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	D1	65	中橋西遺跡	包含地	自然堤防	弥生～平安	E1
26	二塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	C1	66	砂押II遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安	E1
27	砂押古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	C1	67	河原越遺跡	包含地	自然堤防	古墳～平安	E1
28	鳥居塚古墳	古墳	自然堤防	古墳	D2	68	荒井畠中遺跡	城跡	自然堤防	中世	F1
29	愛宕山側面・C道	横穴古墳	丘陵斜面	古墳(未開) 奈良	D1	69	雷東遺跡	包含地	自然堤防	平安	C2
30	大年寺横穴群	横穴古墳	丘陵斜面	古墳・奈良	D1	70	閑場遺跡	包含地	自然堤防	平安	C3
31	宗福寺・横穴群	横穴古墳	丘陵斜面	古墳・奈良	D1	71	芦ノ口遺跡	集落跡	段丘	平安	C1
32	七手内横穴群・A地点・B地点	横穴古墳・塞跡	丘陵斜面	古墳	C1	72	大野田遺跡	墓域	自然堤防	繩文・弥生	D2
33	清水遺跡	集落跡	自然堤防	弥生～中世	D3	73	王ノ壇遺跡	墓域	自然堤防	繩文～中世	D2
34	栗遺跡	集落跡	自然堤防	古墳	D3	74	在家中南遺跡	墓域・河川	自然堤防	弥生～近世	F1
35	中田畠中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳～平安	E2	75	大野田古墳群	古墳・官衛	自然堤防 後背湿地	繩文～中世	D2
36	富沢窓跡	窓跡	丘陵斜面	古墳～平安	C1	76	袋前遺跡	集落跡・官衛	自然堤防	繩文～平安	D2
37	金山窓跡	窓跡	丘陵斜面	古墳	C1	77	中田南遺跡	集落跡	自然堤防	繩文～中世	D3
38	西台窓跡	窓跡	丘陵端部	奈良	C1	78	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	D2

第3表 遺跡地名表

火山灰の降下との関連から、約2万4~5000年前の年代が考えられる。同じ上町段丘上に立地する上ノ原山遺跡では川崎スコリア層の上下から剥片石器と礫石器が出土している。北前遺跡では6~9万年前に堆積した黒色粘土層から、倒木状の樹木や昆虫が出土し、現在よりやや冷涼で池沼のある湿地林が想定された。また芦ノ口遺跡では3万年前より古くなる泥炭層があり、森林の跡が残されている。名取川の上流にある川添東遺跡でも約1万6000年前より多少とも新しいとされる層より、ナイフ形石器や尖頭器、剥片、石刃などが出土している。

段丘上ではなく郡山低地の後背湿地上にある富沢遺跡からは、火を焚いた跡とその周りから100点以上の石器が出土している。当時の環境を復元できる樹木や葉、昆虫、動物の糞なども発見され、2万年前の仙台の様子を伝えている。

縄文時代

早期の遺跡としては、下ノ内浦遺跡(11)、富沢遺跡、北前遺跡、川添東遺跡、山口遺跡(10)、梨野A遺跡などがある。下ノ内浦遺跡からは早期前半の堅穴住居跡2軒、落し穴7基や押型文土器が見つかっている。また富沢遺跡からは早期後半の土器が集中する箇所がある。昭和56年と57年に調査された山口遺跡からは、早期末の土器片を含む遺物包含層が発見され、当時としては沖積地上の遺跡としては最古の例であった。これらとは遠い段丘や丘陵上にも見られ、北前遺跡からは早期末の堅穴住居跡8軒、土坑などが発見され、とりわけ長軸が6mを超える大型の住居跡も含まれている。梨野A遺跡からは早期末頃の土坑と中頃の貝殻腹縁文の土器が出土している。さらに名取川の上流にある川添東遺跡からも早期末の堅穴住居跡が4軒見つかっている。

前期の遺跡としては、三神峯遺跡(8)、北前遺跡、今熊野遺跡(12)などがある。三神峯遺跡からは前期前葉の堅穴住居跡8軒、北前遺跡からは末葉の土坑群が見つかっている。また名取川対岸の今熊野遺跡からは、前期前葉の堅穴住居跡が50軒検出され、全国でも稀な例とされている。

中期の遺跡としては、上野遺跡(13)、北前遺跡、六反田遺跡(14)、山田上ノ台遺跡、下ノ内遺跡、山口遺跡などがある。上野遺跡からは中期中葉の堅穴住居跡や石組炉、貯蔵穴と考えられる土坑などが発見されている。平成16年度の第6次調査では居住域と貯蔵穴状の土坑群の間を分けるような溝状の遺構が確認された。六反田遺跡からは中期中葉から末葉にかけての堅穴住居跡が2軒、北前遺跡からも中期後半の堅穴住居跡5軒や堅穴遺構1などが見つかっている。

山田上ノ台遺跡からは中期末葉の堅穴住居跡33軒や埋設土器や土坑などが発見されている。この遺跡を活用した「(仮称)縄文の森広場」が平成18年にオープンする予定である。下ノ内遺跡でも中期末葉の堅穴住居跡3軒が見つかっている。とくにこれらの住居跡は、複式がある敷石住居で宮城県南半から福島県北東部にかけての中期末葉に限るものと言われている。また近くの山口遺跡からも埋設土器が1基発見されている。

後期の遺跡としては、六反田遺跡、下ノ内遺跡、大野田遺跡(72)、伊古田遺跡(16)、王ノ塙遺跡(73)、山口遺跡、茂庭けんとう城跡(42)、郡山遺跡などがある。六反田遺跡からは後期初頭の堅穴住居跡12軒や土坑、埋設土器、配石遺構の他に、多量の土器を含む遺物包含層を発見している。炭化したオニグルミ、スキから、約3800年から3900年前の年代が考えられている。下ノ内遺跡からは後期前葉の配石墓、集石墓、土器埋設遺構、土坑墓が発見され、墓域であったと考えられている。大野田遺跡でも後期前半の環状集石群、配石遺構、土器埋設遺構、土坑墓が発見され、270点以上の上偶も出土している。墓域と祭祀の場が一体となっていたことが考えられている。山口遺跡からも後期前半の土坑13基と前半から後半にかけての遺物包含層が検出されている。

伊古田遺跡からは後期中頃の遺物包含層が発見され、19体分の上偶が出土している。王ノ塙遺跡では環状配石遺構、堅穴遺構、埋設土器遺構、石核集積遺構や遺物包含層が発見され、主に後期中葉から後葉の時期と考えられている。この時期になると遺構は明確ではないが、郡山遺跡でも官衙の下層から後期後半の土器を出土している。丘陵部に位置する茂庭けんとう城跡からは、後期後半の堅穴住居跡が1軒、埋設土器1基、「落し穴」と見られる土

坑28基が発見されている。

後期になるとこれまでより沖積地に遺跡が集中する様相が見られ、集落城と墓域や祭祀の場の使い分けの明確化などが顕著になっている。

晩期の遺跡としては、山口遺跡、梨野A遺跡、沼原A遺跡、南小泉遺跡(17)、今泉遺跡(18)、高田B遺跡、郡山遺跡、西台畠遺跡(2)などがある。梨野A遺跡からは晩期の木葉と見られる墓壙が4基発見され、7号土坑よりは焼成後に底部や体部に穿孔されたものが含まれている。明確な遺構を検出できる遺跡が少なく、希少な例である。山口遺跡からは河川跡が発見され、横生環境が復元されている。

沼原A遺跡、南小泉遺跡、今泉遺跡、高田B遺跡、郡山遺跡、西台畠遺跡などから土器片が出土している。

弥生時代

前期の遺跡としては、南小泉遺跡、郡山遺跡、安久東遺跡(21)などがある。集落や水田などの遺構は明らかでないが、前期初頭の土器片が出土している。特に安久東遺跡から出土した土器は、西日本の弥生土器の影響を受けた壺片である。

中期になると富沢遺跡や高田B遺跡で大規模な水田跡が発見されている。特に昭和58年(1983)の富沢遺跡での水田跡の発見は、東北地方では青森県田舎館村垂柳遺跡に次ぐ発見であった。また郡山遺跡でも中期中頃以前の水田跡が発見され、隣接する西台畠遺跡からも中期中頃の墓壙が発見されている。中在家南遺跡(74)からは土壙墓のほかに、農耕具を中心とする多量の木製品が見つかっている。この他に船渡前遺跡(19)、南小泉遺跡からは中期中頃の土器が多量に出土している。

後期の遺跡としては、富沢遺跡や山口遺跡で水田跡が発見されている。この他に丘陵上の土手内遺跡や八木山緑町遺跡からは竪穴住居跡が各々1軒見つかっている。沖積地上の下ノ内浦遺跡からは土壙墓や土器棺墓が発見され、墓域として使われていたことが確認された。

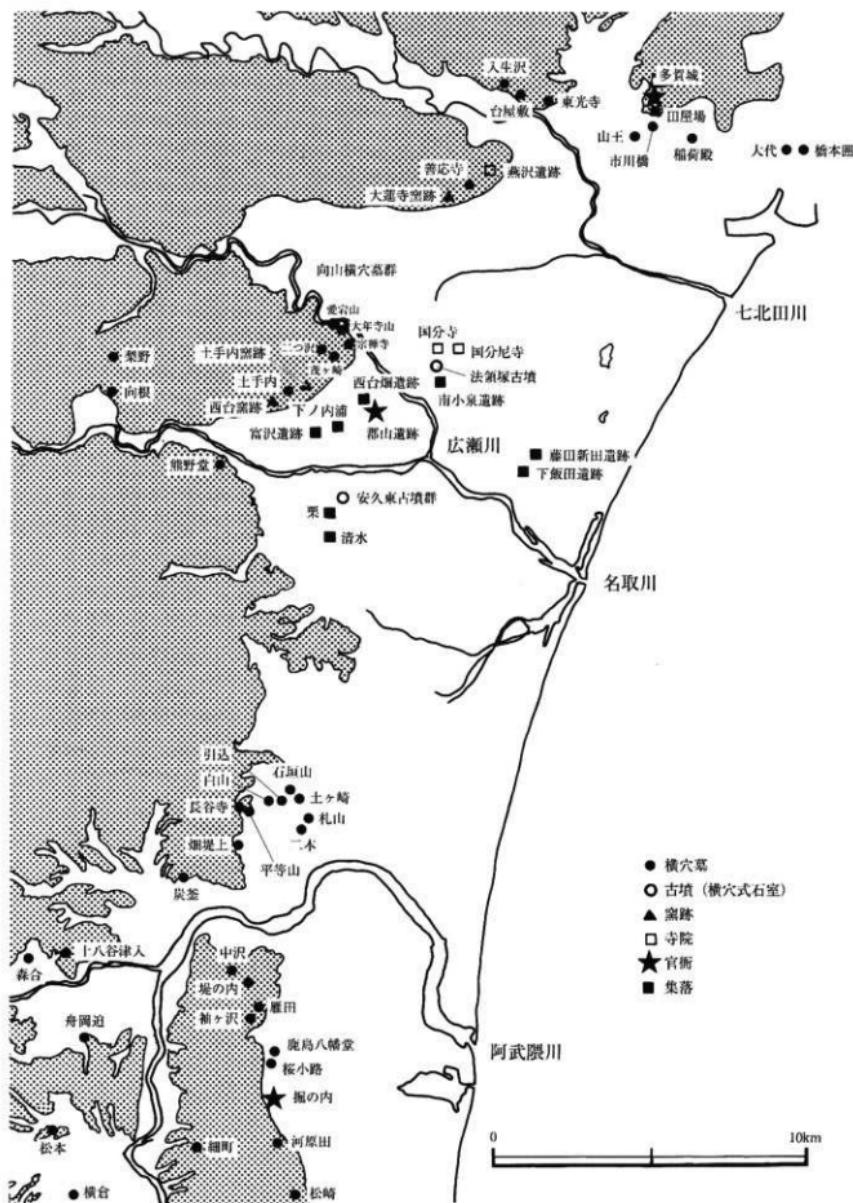
古墳時代

古墳時代の遺跡は、弥生時代より沖積地や丘陵端部を中心に拡大し数を増していく。

前期の遺跡としては、まず方形周溝墓が戸内遺跡(20)、安久東遺跡、藤田新田遺跡、今熊野遺跡などに造られ、その後に高塚古墳として宇賀崎1号墳(方墳)、高館山古墳、飯野坂古墳群(前方後方墳)などが築かれる。集落も形成され、南小泉遺跡、藤田新田遺跡、土手内遺跡で竪穴住居跡が発見されている。前期後半になって仙台平野の中に遠見塚古墳(22)、名取の丘陵上に雷神山古墳などの全長100mを超えるような大型古墳が造られる。大規模な土木工事を可能にする技術と人の動員力を有する支配者の存在が認められる。

中期になると裏町古墳(24)、兜塚古墳(23)などの帆立貝形古墳や、割り抜き石棺の出土した二塚古墳(26)、船形石棺の一塚古墳(25)などが築かれるようになる。これらの古墳に近い原遺跡でも埴輪棺墓や10基ほどの円墳が発見されている。このように古墳は仙台平野の中央部には造られず、広瀬川南岸の丘陵端部から平野部にかけて造られている。なお中期後半から後期にかけて小規模な円墳や前方後円墳によりなる大野田古墳群(75)が名取川の北岸にも造られている。これらの古墳には埴輪が多用され富沢窯跡(36)では5世紀後半に操業している。

後期といわれる6世紀代では仙台平野の古墳の築造は衰退すると言わされている。宮城県南部の丸森町台町古墳群や角田市の横倉古墳群のように円墳が密集したり、横穴式石室を有するような群集墳は存在していない。7世紀になると南小泉遺跡に隣接する平野中央部で法領塚古墳が出現する。法領塚古墳は墳丘の径が32m、高さ6m程の円墳で、巨石を用いた横穴式石室を有し、7世紀前半の古墳とされている。このような高塚古墳は稀で、古墳の多くは崖の側面に横穴を掘り、その中に埋葬する横穴墓が多数である。郡山遺跡から北西へ2kmの大年寺横穴墓(30)が最も古く、6世紀末か7世紀初頭には造り始められている。これに隣接して愛宕山横穴群(29)、宗禅寺横穴群(31)、土手内横穴群(32)などが造られており、奈良時代まで継続する横穴墓もある。



第10図 仙台平野の関連遺跡

この他に注目したいのは郡山遺跡の南約3kmにある安久遺跡(41)、安久東遺跡で発見された安久東古墳群である。古墳は7基発見されているが、本来はさらに多い数の古墳が存在していたと想定されている。これらの古墳はすべて河原石積みで、割り石等を用いていない。古墳群の中の安久諏訪古墳は、この技法により全長6.5mの胴張り型の石室を有し、羨門から左右に石垣状に小型の河原石による葺石が巡っている。このような構造の古墳は関東平野北西部に見られるものである。この古墳群の南1kmには関東系土師器の出土が初めて報告された清水遺跡(33)がある。この土師器は群馬県南部から埼玉県西北部に類似する例があり、先に述べた河原石積みの古墳と同じ分布域をルーツに求めることが出来る。細かな時期差については検証の必要があるが、関東からの大きな人の流れが7世紀代に入ってからあったことは言えよう。またこれらの遺跡の間には、東北地方南部の土師器編年上の標識土器を出土した栗遺跡があり、40軒ほどの堅穴住居跡が検出されている。郡山遺跡の西に隣接する長町駅東遺跡では数百軒にのぼる堅穴住居跡が検出され、調査が進められている。

7世紀半ばに郡山の地にⅠ期官衙が造られると寺院造営のための瓦が供給される。現在は遺跡が失われ確認することが出来ないが、西方3kmの西台窯跡(38)で焼成したものと考えられている。またこのころ土手内窯跡(32)でも須恵器の生産が行われている。

奈良時代

郡山遺跡のⅡ期官衙が活動していた頃、大蓮寺窯跡で郡山遺跡に供給されたのとは異なる単弁蓮文軒丸瓦や軒平瓦が焼成されている。これらの瓦は大蓮寺窯跡から北東へ1.5kmの寺院跡である燕沢遺跡に供給されている。郡山遺跡のⅡ期官衙のうち、方四町Ⅱ期官衙が終末を迎える頃に仙台平野北端の丘陵上に陸奥国の大賀城が造られる。この後の天平元年(729)に陸奥国名取郡から昆布が都に送られていたことが明らかになっている。名取郡衙の遺構は発見されていないが、郡山遺跡の南西1.5kmの袋前遺跡(76)と大野田古墳群(75)から真北方向の建物跡4棟が溝跡に区画されるよう発見されている。建物跡の規模が6間以上のものや倉庫風の縦柱建物跡があるなど、官衙と見てほほ間違いない様相である。今のところ10世紀前半以前ということしか明らかではないが注目される。

8世紀半ば頃に仙台平野のほぼ中央部に陸奥国分寺、国分尼寺が造られる。台原、小田原丘陵上の安養寺下圓瓦窯跡、蟹沢中窯跡などから瓦が供給されている。また8世紀半ば以降に南小泉遺跡の南0.5kmの神橋遺跡(64)では掘立柱建物跡や堀跡が検出され、何らかの公的施設の跡であると考えられている。下ノ内遺跡、伊古田遺跡、下ノ内浦遺跡、六反田遺跡、山口遺跡、元袋遺跡(40)、中田南遺跡(77)などからは堅穴住居跡が検出され、集落が形成されていたことも明らかになっている。

平安時代

平安時代の遺跡は、自然堤防上において拡大し、検出される堅穴住居跡の軒数も増加していく。集落としては下ノ内遺跡、伊古田遺跡、下ノ内浦遺跡、六反田遺跡、山口遺跡、安久遺跡、安久東遺跡、清水遺跡、中田畠中遺跡(35)、南小泉遺跡、山田上ノ台遺跡、芦の口遺跡(71)などである。そのうち下ノ内浦遺跡、南小泉遺跡、中田畠中遺跡、山田上ノ台遺跡では掘立柱建物跡が集落内に出現している。生産遺跡としては、富沢遺跡と山口遺跡、郡山遺跡で水田跡が発見されている。また北前遺跡からは半地下式の須恵器窯跡、嶺山C遺跡からは製鉄炉が発見されている。

中世

仙台平野南部の各所から掘により区画された屋敷跡が発見されている。山口遺跡、今泉遺跡、南小泉遺跡では12世紀後半段階での屋敷跡を検出している。中田南遺跡、戸ノ内遺跡、下飯田遺跡でも14世紀までには、溝で区画された痕跡があり、屋敷跡と考えられる。そのような中で14世紀の半ば以降の南小泉遺跡や今泉遺跡では、城館であったと言われている。富沢遺跡や山口遺跡では13世紀以降は、水出が屋敷跡近くで作られている。

王ノ塙遺跡では中世以降に、3時期の屋敷跡があったことが確認されている。

近世以降

近世以降は伊達政宗の仙台城築城と城下町の造営により、現在の仙台市域は大きく変貌する。慶長5年(1600)に間が原の合戦が起こると、石田三成と結ぶ会津の上杉景勝が徳川家康の背後を脅かす動きを見せるに至った。徳川方の有力な武将であった伊達政宗は、同年7月名取郡北目城(3)に入り、ここを拠点として上杉方と対峙した。政宗は12月25日に国分氏の旧城である千代城に赴き、そこに新城の縄張りを行い「仙台」と命名している。慶長7年(1602)に仙台城は完成し、翌慶長8年(1603)8月に岩出山城より仙台城へ移っている。仙台城跡の発掘調査では政宗による創建段階の1期石垣や、本丸の主要な建物となる大広間跡が発見されている。城下は宮城郡荒巻、小田原、南日、小泉、名取郡根岸村の5カ村の入会であった原野や谷地に建設された。24カ町が作られ、四代藩主伊達綱村の世に最大の発展を遂げたと言われている。

安政元年(1772)に完成した「封内風土記」によれば、根岸村に北長町、平岡村に南長町があり、駅として機能していたことが知られている。同時に郡山村も戸口67、男女375人と神社や古墓(北目城)などがあると記されている。江戸時代以降明治初年まで奥州街道沿いの長町と隣接しながら、郡山は農村的な姿を留めていたようである。明治20年(1887)に塙釜まで東北本線が開通すると、郡山の地は長町方面と線路により分断されてしまい、南北1.8kmの間が横断することが出来ない状況となった。東北本線以東の地は広瀬川と名取川により遮断されており、周囲との交通も限られた道で長町を経由せねばならず、きわめて不便な地となっている。国道4号線のバイパスが昭和40年代に開通すると宅地化が進んだが、発掘調査が始まつた昭和55年頃は畠地や水田が残る農村の風景を留めていた。幸うじて以下に報告するような遺跡の内容が明らかになってきたが、未来に向けてどのような地域として土地利用されて行くのかは明らかになっていない。生活と関連付け、遺跡活用の接点を探すことが問われている。

(参考文献)

- 仙台市教育委員会(2003) 仙台市文化財調査報告書265集「山田上ノ台遺跡—第3次発掘調査報告書—」
仙台市教育委員会(1995) 仙台市文化財調査報告書198集「上ノ原遺跡—国道286号線改良工事関係発掘調査報告書—」
仙台市教育委員会(1989) 仙台市文化財調査報告書129集「北前道路—第3次発掘調査報告書—」
東北大埋蔵文化財調査研究センター(1998) 「東北大埋蔵文化財調査年報9」
仙台市教育委員会(1997) 仙台市文化財調査報告書217集「相ノ原・大貝・川添東遺跡—国道286号線改良工事関係発掘調査報告書—」
仙台市教育委員会(1991) 仙台市文化財調査報告書149集「宮沢遺跡—第30次発掘調査報告書Ⅰ、Ⅱ—」
仙台市(1995) 「仙台市史 第別編 考古資料」
宮城県考古学会(2004) 平成16年度宮城県遺跡調査成果発表会要旨
仙台市教育委員会(2000) 仙台市文化財調査報告書43集「大野田宿跡・王ノ塙遺跡・六ヶ所遺跡—仙台市富沢西地区西整理事業関係道路発掘調査報告書—」
仙台市教育委員会(1995) 仙台市文化財調査報告書193集「伊吉田遺跡—仙台市高速鉄道関係発掘調査報告書—」
仙台市教育委員会(2000) 仙台市文化財調査報告書249集「下ノ原遺跡—都市計画道路「山内・柳生線」開通追跡発掘調査報告書—」
仙台市教育委員会(1990) 仙台市文化財調査報告書137集「茂庭けんとう城・東館跡—発掘調査報告書—」
仙台市教育委員会(1984) 仙台市文化財調査報告書61集「山門遺跡—仙台市体育館建設予定地—」
仙台市教育委員会(1983) 仙台市文化財調査報告書45集「茂庭—発掘調査報告書—」
仙台市教育委員会(2002) 仙台市文化財調査報告書255集「中在家南遺跡(第3・4次)・押上遺跡(第3次)発掘調査報告書」
仙台市教育委員会(2001) 仙台市文化財調査報告書253集「八木山城跡遺跡ほか」
仙台市(2000) 「仙台市史 通史編2 古代中世」
仙台市教育委員会(1998) 仙台市文化財調査報告書229集「原遺跡—第1・2次発掘調査報告書—」
仙台市教育委員会(1999) 仙台市文化財調査報告書240集「原遺跡—第3次発掘調査報告書—」
宮城県教育委員会(1981) 宮城県文化財調査報告書77集「(1) 清水遺跡」「東北新幹線関係道路調査報告書—V—」
仙台市(1960) 「仙台市史 3 別編」
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所(2004) 「奈良奥舟札の『発見』」「奈良文化財研究所紀要2004」
古代城査官監査会(2005) 第31回古代城査官監査会資料
仙台市(1989) 「仙台の歴史」
仙台市教育委員会(2002) 仙台市文化財調査報告書259集「仙台城跡—平成13年度 調査報告書—」
仙台市教育委員会(2003) 仙台市文化財調査報告書264集「仙台城跡Ⅱ—平成14年度 調査報告書—」
宝文堂(1975) 仙台叢書「封内風土記 第一卷」

第3章 基本層序

第1節 基本層序

郡山遺跡内の土層の堆積状況は各地点で異なっている。現況は南部では宅地、水田、畑地で、北部では宅地と畑地である。いずれの地点でも古代の遺構される層はほぼ同じ特徴で、層順についても大きな違いはない。住宅地や畑地では、地表から60~80cmの深さで黄褐色の粘土質シルト層があり、その上面で遺構が検出されている。地点により色調や層厚に違いがあるが、遺跡内のはほ全城に渡り分布している層(第11図中Ⅲ)である。多くは耕作により削平されているが、一部ではこの層の直上に黒色の部分が観察され、遺構はそれを切って掘り込まれている。そのような箇所では、遺物が黒色の部分を覆うように多量に出土したり(第65次G区)、上層に平安から中世の水田遺構の形成が見られる(第65次N区、第84次)。これはこの地点の上層が後世の削平をあまり受けっていないことを示すものと見られ、層上面の黒色の部分が官衙の造営ならびに活動した際の表土の可能性がある。

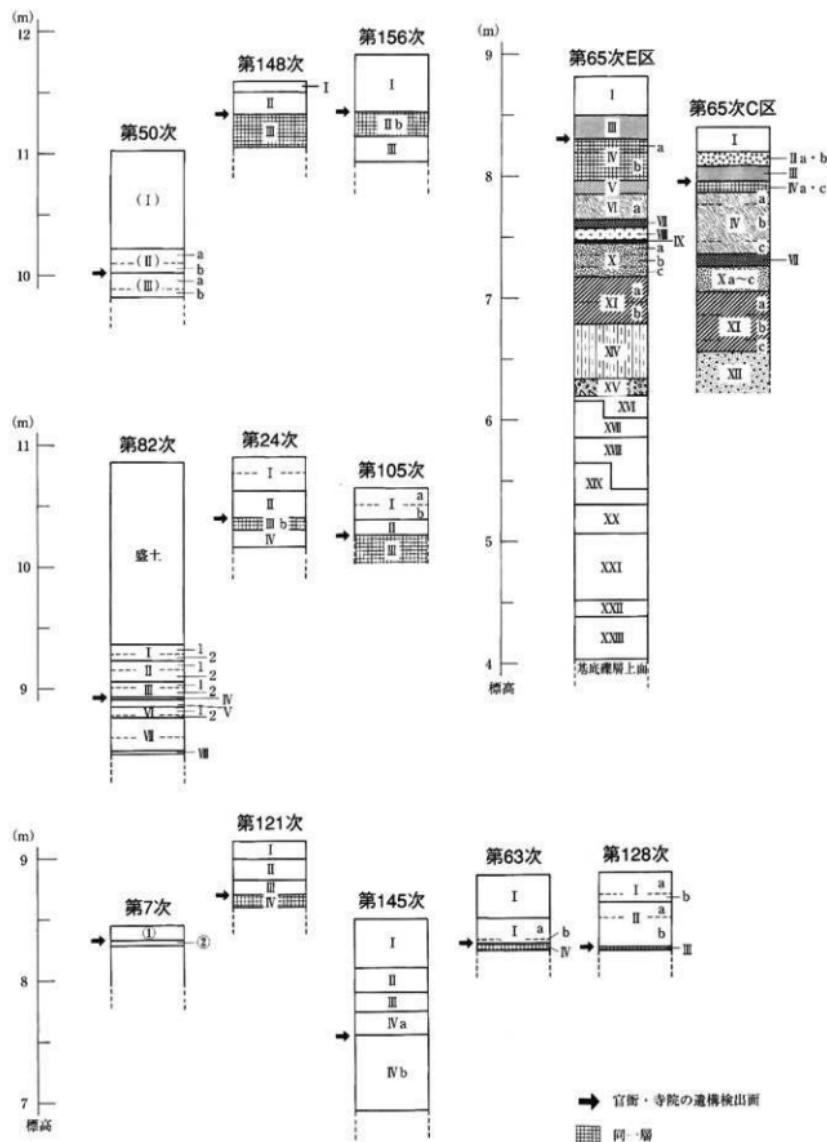
遺跡内では畑地の部分では「天地返し」と呼ばれる深度の深い耕作痕跡により、遺構を検出できる層が溝状に削平されている。深いところでは現地表より1mから1.2mに及んでいる。これは畑地の地力回復と酸性土壤の中和を目的としており、痕跡中の溝から出土したものは、昭和20年代から50年代頃までの陶器やガラス瓶、ビニール製品が多い。よって遺構の検出される深さまでは、耕作による土層の攪拌が著しく、現状が畑地の部分では古代以降に堆積した層をそのまま留める箇所はない。

現状が水田の部分では耕作深度が浅く、その下層に平安時代から以降の水田跡の堆積層を確認出来る地点がある(第89次、第121次)。ただし現在の水田耕作土の直下で、古代の遺構が直接検出される箇所のほうが多い。その原因は大正年間から東北本線長町駅の東側にレンガ工場があり、レンガの材料にする粘土の採掘により土取りを受けたためと考えられる。そのような箇所は周囲の地形とは異なり一段低くなっている(第4次、第138次)。本来は堆積していた層が、大規模に削平されたと考えられる。昭和40年頃まではレンガの生産が行われており、遺跡内の各所でこのような堆積状況が見られるのである。

現在遺跡内はほとんど宅地化しており、畑地や水田は少ない。ただ宅地の下では畑地や水田と同じような土層の堆積状況を示している。

遺跡内で基底疊層まで連続して土層の堆積が確認できた第65次調査での基本層序の特徴をあげておく。なお層位番号は調査地区ごとに付しているので、他の調査地区的層位番号とは対応しない。

- I 層 10YR5/2灰黄褐色シルトなどで、粘性はないがしまりはややある。発掘調査以前の旧耕作土である。
- II 層 10YR4/2灰黄褐色シルト質粘土(a)あるいは粘土(b)などで、粘性、しまりはある。
- III 層 7.5YR5/2灰黄褐色粘土質シルトなどで、粘性、しまりともややある。上面に灰白色火山灰を含んでいる。平安時代の水田跡を検出する場合がある。
- IV 層 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトなどで、粘性、しまりともややある。上面に10YR3/1 黒褐色粘土質シルトが見られる箇所がある。上面が官衙、寺院の遺構検出面である。
- V 層 10YR6/3にぶい黄橙色粘土質シルトで、粘性はややあるが、しまりはない。
- VI 層 10YR7/3にぶい黄橙色シルト質粘土などで、粘性はややあるが、しまりはない。層下部に黒色の植物遺体が互層に入り込んでいる。
- VII 層 7.5YR6/2灰褐色粘土で、粘性があり、しまりもややある。弥生時代の畦畔状遺構と遺物を含んでいる。
- VIII 層 7.5YR6/3にぶい褐色粘土で、粘性があり、しまりもややある。
- IX 層 7.5YR5/2灰褐色粘土で、粘性、しまりともややある。弥生時代の水田跡を検出している。



第11図 遺跡内の基本層序



第12図 基本層序標記地点

- X 層 10YR7/1灰白色粘土などで、粘性があり、しまりもある。
- XI 層 10YR4/1褐灰色粘土などで、粘性が強く、しまりもある。縄文時代の遺物を含んでいる。X I a~c層まで徐々に変化し、境界が明瞭ではない。
- XII 層 7.5YR6/2灰褐色粘土で、粘性があり、しまりもややある。縄文時代の遺構と遺物を検出している。グライ化が著しい箇所がある。
- XIII 層 10YR6/2灰黄褐色シルト質粘土などで、粘性があり、しまりもややある。
- XIV 層 7.5YR5/3に近い褐色粘土質シルトで、粘性はややあるが、しまりはない。
- XV 層 5G4/1暗緑灰色砂で、粘性はないが、しまりはややある。礫石器が出土している。
- XVI 層 7.5Y5/2灰オリーブ色シルトで、粘性があり、しまりもややある。
- XVII 層 10YR4/2オリーブ灰色シルトなどで、粘性、しまりともある。
- XVIII 層 2.5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルトで、粘性がややあり、しまりがある。下部に炭化物をブロック状に含んでいる。
- XIX 層 10GY4/1オリーブ灰色粘土質シルトで、粘性、しまりともある。未分解の葉などの植物遺体を含んでいる。
- XX 層 7.5GY4/1暗緑灰色粘土で、粘性はないが、しまりはある。植物遺体を少量含んでいる。
- XXI 層 10G4/1暗緑灰色砂で、粘性はあるがしまりはない。
- XXII 層 5G4/1暗緑灰色砂質シルトで、粘性、しまりともややある。木片を帶状に含んでいる。
- XXIII 層 10BG5/1青灰色砂で、粘性はあるがしまりはない。この層より下部は躍層となる。

第2節 遺構の検出状況

官衙や寺院の遺構は、畠地や現状が宅地でも以前に畠地であった所は、耕作土の直下で検出出来る。しかし「天地返し」と呼ばれる深い耕作痕跡により、溝状に削平されている(写真1)。この溝状の高低差を均すような作業を行って初めて遺構の輪郭が明らかになってくる(写真2)。それでも天地返しが深い部分は溝状に下がり(写真2の手前)、遺構を深く削平している。深いところでは地表から1.2mにも及び、堅穴住居跡では床面が失われるほどである。ここを丁寧に調査し遺構を掘り下げる必要になるが、後に報告するように2時期の官衙が同一層上で重なって検出される(写真3)ため、人為的に埋め戻された遺構間の重複関係の把握が難しい場合がある。深い井戸跡の調査では木簡の出土も想定され、湧水の中でも木質の小破片を見逃さないようしなければならない(写真4)。また柱穴の検出状況から、建物跡の規模の把握や材木列と構造物、門跡との同時性の検討など、他の遺跡とはやや違った点で留意しながら発掘調査をして行かねばならない。



写真1 天地返しの状況



写真2 遺構の検出



写真3 造構の重複（第35次）



写真4 井戸跡の調査（第35次）



写真5 水田跡の遺物出土状況（第84次）



写真6 古代末期の溝跡（第134次）

本書は官衙と寺院の総括的な報告を目指しているため、その他の時期の報告を第5章中の「第4節 その他の遺構」で掲載する以外は報告の対象としていない。以下では官衙と寺院以外の遺構についての検出状況を述べておく。

現状が水田か、宅地でも水田に盛土をした所では、第1節で述べたように土取りによる削平を受けていなければ、上層に10世紀前半で降下した灰白色火山灰の時期を前後する水田跡(第65・84・159次)や、古代には含まれないそれ以降の水田跡(第65・121次)が稀に検出される。第84次調査区では灰白色火山灰の降下以前の水田跡が発見され、「午」と墨書きされた須恵器環を含む赤焼土器、土師器環の8点が重ねられ出土した(写真5)。隣接する第159次調査区でも灰白色火山灰降下後の水田跡から赤焼土器8点、土師器環1点が同じように重ねられ出土しており、欠損していない完形の土器を埋納する農耕儀礼などが考えられる。

官衙や寺院の遺構を検出する同じ層上でも、官衙廃絶後の遺構が一部に見られる。第134次調査区では古代末期に属すると推定される溝跡が2条発見され、道路や屋敷の区画となる可能性を考えている(写真6)。また官衙以前の遺構も第5章第4節で触れた以外にも、第96次調査で古墳の周溝と見られる溝跡が発見されている(写真7)。古墳時代の遺構、遺物は少なく第31次調査の溝跡から土師器環や高环が、出土層位は上層となるが第89次調査区からは埴輪の突帯部の破片が出土している(写真8)。遺構を検出する層中から少量ではあるが弥生土器片を出土する地区もある(第44・65次)。

下層の調査は官衙や寺院の遺構を調査対象としている国庫補助事業においては、遺構の保全のために行っていないが、宅地造成や集合住宅などの開発に伴う調査では実施(第65・124・141次)されている。土層の観察によれば遺跡内の全域に弥生時代や縄文時代の遺構、遺物が発見される層が広がってはいないようである。第65次調査では弥



写真8 墓輪片（第89次）



写真9 弥生時代の水田跡（第65次）

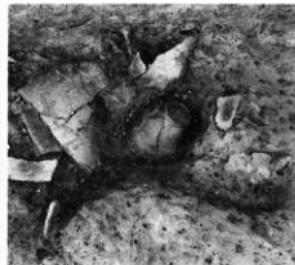


写真10 繩文土器の出土（第65次）



写真11 繩文時代後期中墳の遺構、遺物（第65次）

生時代の土層が2層あり、下層のⅣ層から水田跡が発見されている(写真9)。さらに下層からは縄文時代後期後半の遺構や遺物が発見されている(写真10・11)。

このように各時代の遺構が層を重ねて複数している状況にある。ただ遺跡の全域で各層が確認されるものではなく、地点により堆積状況は異なっている。その中にあって官衙や寺院の時代の遺構は、ほぼ全域で検出され、遺構の密度がきわめて高いと言える。他の遺跡では寺院の版築が土壇状の高まりを見せたり、官衙の中心地区的立地がやや標高の高い地区に集中する場合などがあるが、郡山遺跡の場合はそのような事はなく、平坦な土地の下に官衙や寺院の時代の遺構が数多く広がっているのである。

第4章 研究略史

ここではこれまで郡山遺跡がどのように扱われてきたのかについて、略述することにする。

郡山遺跡について初めて取り上げたのが大正3年(1915)の『考古学雑誌』第5卷第5号に「漆液を容れたる陶器(附録奥国名取郡家の遺址)」と題した論文である。これを著した中山樵氏は、レンガ工場による粘土採掘の際に漆の入れられた須恵器の平瓶が出土したことにより注目し、それらの使用された年代を1000年から1200年前とした。さらに粘土の採掘が行われている田字名で矢口、矢来地区(現在の郡山二、三丁目付近)と東北本線の間では、土器や石器が出土していること、仙台平野の南部から郡山古墳や多賀城への交通路を想定した場合にその路線上にあること、郡山の地名があることなどから、郡家の存在したところであろうと考えた。

「郡山」という地名からの指摘は昭和5年(1930)の『宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告 第5輯』にも載せられ、郡家が置かれたところとしている。昭和13年(1938)の『賛雲』第22号には内藤政恒氏が「東北地方発見の重瓣蓮花文鏡瓦に就いての一考察(下)」を発表し、郡山遺跡出土の軒丸瓦を多賀城で葺かれた軒丸瓦の模倣と捉え、さらに平安時代中頃の名取郡衙の可能性にふれている。ここで掲載された軒丸瓦は昭和49年(1974)に出版された『東北古瓦図鑑』にも載せられており、仙台市郡山在家の諏訪神社東方の畠中より出土したと記されている。

以上のような指摘がなされていたが、現地において遺跡として認知される大きな出来事が昭和20年代に起きていている。昭和24年(1949)の冬か、昭和25年の春に仙台市郡山在家浦の畠地から多量の瓦が出土した。これを目撃した諏訪神社宮司の二階堂武夫氏は、東北大教授の伊東信雄氏に連絡し、伊東氏はその時の様子を写真撮影している(写真参照)。昭和25年(1950)『仙臺市史 3 別編1』の中で「四 郡山古瓦出土地」として、先ほどの写真を掲載し、平安時代初期の寺院跡ではないかとする予測を述べている。また伊東氏は同書の中で「九 北日古代聚落跡」という別項を起こし、中山樵氏の発表した『考古学雑誌』の内容の抄録を掲載している。そして結びの箇所で、出土遺物から横穴式古墳と同時代であると述べている。さらに同書の図中で北日古代聚落跡の位置として、後に明らかになる方四町Ⅱ期官衙の南東辺付近を標示している。この頃に採集された軒丸瓦と鷹尾の破片が東北大で所蔵され、昭和57年(1982)に発行された『東北大文学部考古学資料図録』に掲載されている。

地点や時期についての詳細な記載はないが、昭和38年(1963)『蝦夷』の中で高橋富雄氏は郡山の地から櫛木が出土したこと伝えている。この記載について櫛木の出土した地点が、地元には方四町Ⅱ期官衙の南辺で南東コーナー付近であったと話す人がい



写真(表) 瓦の出土状況(伊東信雄撮影)



写真(裏) 記録(伊東氏の自著)

右(ペン書き) 「仙台市諏訪 郡山遺跡 昭和二十四年の冬か 二十五年の春撮影」

左(鉛筆書き) 「位置は諏訪神社の神宮に随くとわかるかも知れない」

る。レンガ工場による粘土採掘の際に大規模に掘削されたようである。

昭和54年(1979)に発掘調査がされると掘立柱建物跡の発見から官衙であるということと、出土した軒平瓦や土器が多賀城創建期より古いとする見方から注目を集めました。発掘調査の進展に伴い以下のような指摘がされるようになります。昭和59年(1984)『角田市史1 通史編(上)』において高橋富雄氏は、角田市に所在する角田郡山遺跡との対比検討などから、郡山遺跡(仙台市)を名取郡団やそれに伴う櫛跡とする見解を出している。

昭和59年(1984)『日本の古代遺跡15 宮城』の中で工藤雅樹氏は「多賀城以前および多賀城創建期の城柵・官衙遺跡」として、郡山遺跡、名生館遺跡、伏見廬寺などの6遺跡を上げている。郡山遺跡については名取郡の郡衙、文献に現れない城柵、多賀城以前の陸奥国府とする説などを上げている。

昭和59年(1984)『日本の美術2 No.213多賀城跡』の巻末の附録のなかで、桑原滋郎氏は郡山遺跡の下層遺構(I期官衙)は陸奥国府で、上層遺構(II期官衙)は東北地方の城柵のスタートであろうと述べている。また昭和60年(1985)『大宰府と多賀城』においてもI期郡山遺跡国府説、II期郡山遺跡城柵説を唱えている。なお桑原氏はこの時期からI期官衙の造営基準方向は西に60度かたよった方向であるという指摘をしている。

昭和63年(1988)『国説宮城県の歴史』で今泉隆雄氏は、I期、II期官衙について国衙の可能性を指摘している。当時の陸奥国で管轄していた最上、置賜両郡との交通路の存在や出羽国の成立、多賀城の建造などを関連付け、畿内系土師器の出土から国司の赴任していたことを示唆している。

平成元年(1989)になると阿部義平氏は『国立歴史民俗博物館研究報告第20集』の中の「城柵と国府・郡家の関連—仙台市郡山遺跡をめぐって—」と題した論文で、詳細に郡山遺跡について論じている。I期官衙を前期遺構、II期官衙を後期遺構として扱っている。前期遺構については越国の柵の設置などから柵と見るべきであり、後期遺構は多賀柵に先行する中核的柵であって、陸奥国府も兼ねたものであったろうとしている。前期から後期遺構への改造は越国の柵の修理と大差ない年代と考える点や、多賀城を創出する理由が郡山遺跡の廃絶につながるとするなど現在でも示唆に富む点がある。同じく平成元年(1989)に出された「考古学ライブラリー50 官衙」でも官衙の役割については同様の見解を取っている。またこの頃に出された「考古学ライブラリー51 城柵と蝦夷」で工藤雅樹氏はI期官衙が名取郡衙か文献に名前の残らなかった柵跡、II期官衙は国府であるが柵の一つであるという見解を出している。

平成元年中にこれらの書物や論文が出される中で、官衙の性格については東北地方の城柵の一つとして扱うべきであろうとする見解が主となってくる。しかし平成元年度中の発掘調査で新たな要素が加わる。第83次調査区で方形の石組池が石敷きや石組構と併に方四町II期官衙の中心部から発見されたのである。当時このような遺構は飛鳥時代の宮殿跡である石神遺跡以外からは発見されていなかった。これは後に「服属儀礼」という視点から、方四町II期官衙の役割や藤原京成立以前の明日香地方とのかかわりを考えさせる上で重要な論点となってくる。さらに同年度中に方四町II期官衙南前面の第85次調査区で四面廻付建物跡が、第65次調査区では桁行が極めて長い長舎構造の建物跡が複数発見される。新たな官衙ブロックの存在から「南方官衙」と呼称することにした。これも平成10年(1998)に行われた第124次調査や平成13年(2001)の第138次調査で様相がより明らかになると、II期官衙の全容にかかる重要な成果となって行く。

城柵という視点ではなく論じたのが山中敏史氏で、平成6年(1994)『古代地方官衙遺跡の研究』の中でI期官衙を多数の竪穴住居や材木列の存在から軍事的拠点としての性格を見出し、さらにコオリの地名などから初期評価とした。II期官衙についてはI期官衙をより整備しているとし評価あるいは初期の郡衙、併せて国衙の機能も持ち合っていたとしている。しかし平成9年(1997)『多賀城市史 第1巻 原始・古代・中世』の中で桑原滋郎氏は、I期官衙を日本最古の地方官衙とし、国府の可能性があるとしている。またII期官衙についても城柵であり国府が置かれていたとした。

これらに加えて先に述べた石組池についての評価が新たに加わってくる。平成6年(1994)『市史せんだい第4号』に今泉隆雄氏は「郡山遺跡へ・郡山遺跡から」と題し、方四町Ⅱ期官衙の中心で発見された石組池と飛鳥の石神遺跡の二つの池を比較検討し、郡山遺跡の池は蝦夷の服属儀礼に用いたものであるとした。また平成8年(1996)に奈良国立文化財研究所飛鳥資料館の特別展に伴う『齊明紀』の中でも、齐明朝を象徴する石と水の文化が陸奥にもたらされたとしている。さらに熊谷公男氏は平成9年(1997)『蝦夷と王宮と王權と一般夷の服属儀礼からみた倭王權の性格』の中で、蝦夷の服属儀礼と倭王權との関係を検討し、池が使用されていた年代は大宝令以前と考えるのが妥当として、Ⅱ期官衙も大宝令施行以降は廃絶するとした。そしてⅡ期官衙も規模から見て、天武・持統朝の陸奥国府であったと推定している。

平成10年(1998)になると『蝦夷と古代東北史』の中で工藤雅樹氏は、Ⅰ期官衙は柵であった可能性を考え、文献には伝わっていない、いわば名取柵とも言うべきものを想定した。柵であれば移民のいたことも考えられ、関東地方や畿内地方の土師器が出土していることに注目した。Ⅱ期官衙については、多賀柵や出羽柵が陸奥国や出羽国の国府であったように、国府ではあるが柵の一つであったと考えられるとしている。

平成12年(2000)『仙台市史 通史編2 古代中世』の中の「第一節 陸奥国の始まりと郡山遺跡」で今泉隆雄氏は、Ⅰ期官衙は越國の渟足柵に対応して設けられた城柵、Ⅱ期官衙は陸奥国府とした。また靈龜元年(715)の続日本紀に見える陸奥国府がこれにあたるとした。さらに今泉隆雄氏は平成13年(2001)『条里制・古代都市研究通巻17号』の「多賀城の創建—郡山遺跡から多賀城へ—」中で、Ⅰ期官衙とⅡ期官衙について同様の見解を述べた他に、Ⅱ期官衙は飛鳥の倭京がもつ古い要素をもった国府であり、藤原宮がもつ新しい要素も持っているという。

平成13年(2001)の第138次調査で南方官衙の北側を区画する溝跡(外溝)を発見したことにより、方四町Ⅱ期官衙外郭の外側にもう一条の溝が巡っていることが明らかになった。この間は造構が配置されず空隙地となっている(註8)。このような状況は方四町Ⅱ期官衙の南辺と西辺において確認されている。これが四方に確認されれば日本で最初の条坊制が取り入れられた藤原京の宮城の周辺の様相と同じになる(註9)。そこからは飛鳥地方との強い関連が窺われ、官衙の年代や性格を考える上できわめて重要なとなる。

平成15年(2003)『古代王權の空間支配』の中の「藤原京・平城京の構造」で阿部義平氏は、軒丸瓦の年代や分布についてふれると併に、上層造構(Ⅱ期官衙)には国司の駐在することを指摘し、天武朝に計画された新城との関連を論じている。

平成16年(2004)『古代の官衙遺跡Ⅱ遺物・遺跡編』の中の「IX-1城柵」で進藤秋輝氏は、石敷広場や石組池の存在から飛鳥において蝦夷を饗宴した石神遺跡と同じ機能を想定すると併に、4町四方の单郭構造の城柵であるとした。しかし国府であるかどうかについては、平城遷都以前の国府の類例がないとして今後の検討が必要である(註10)としている。

同じく平成16年(2004)に刊行された『蝦夷の地と古代国家』、『古代の蝦夷と城柵』でも熊谷公男氏は、考古学による発掘調査成果を取り上げる中で、郡山遺跡の造構や出土遺物について紹介し、記録に残されなかった新たな日本史像の構築に用いている。

郡山遺跡は東北地方の古代を考える時に、考古学と古代史の両面から語られなければならない現状にある。またこれに目を向けずして古墳時代から古代国家への歩みの実像を捉えることは出来ないであろう。一地方官衙の探求から、日本の飛鳥時代から奈良時代の中での歴史的な意味付けが求められている段階に変わりつつある。発掘調査が開始された当初には考えも付かなかつた事態であり、四半世紀に亘る発掘調査の成果であろう。

第5章 発見遺構と出土遺物

第1節 I期官衙

I期官衙を地区ごとに分割し、代表的な遺構について記述する。文章化しなかった遺構については第4表～第14表を参照していただきたい。さらに詳しい内容について必要な場合は、表中に示した備考中の年度概報を引いていただきたい。

【I期官衙中枢地区】

SB1215建物跡（第2、77次・第14図）

桁行7間、総長18m（柱間寸法234～262cm、平均257cm）、梁行2間、総長5.2m（柱間寸法260～264cm）の建物跡で、桁行の方向はE—32°—Sである。柱穴は一辺50～166cmの隅丸長方形である。柱痕跡は直径18～28cmである。第2次調査のSB16建物跡から遺構番号を変更している。

SB1208・1218建物跡を切り、SA1212・1220板塀跡、SB15・1210建物跡に切られている。

SA651板塀跡（第51次・第14図）

調査区の東端では途切れているが、西では調査区の外へ延びている。方向はE—31°—Sで12m分検出した。上幅32～68cm、深さ45cmの布堀の中に、丸材と板材、角材を立て並べている。丸材は140～210cmの間隔をあけて設置され、その間に板材を縦に並べている。丸材の柱痕跡は直径14cm程度、板材の痕跡は幅6～8cm、長さ22～28cmである。東端より6.5～8mの間では材痕跡が検出されず、幅1.5m程の通り間口状になっていると考えられる。間口状の両側の柱痕跡のみが一辺20cm程の角材となっている。

配置関係から第107次調査で発見されているSB1610建物跡に連続していると推定される。

SB655建物跡を切り、SB638建物跡に切られている。

SB1610建物跡（第107次・第14図）

桁行5間かそれ以上、総長14m（柱間寸法238～322cm、平均271cm）、梁行2間、総長4.76m（柱間寸法238cm）の東西棟の建物跡で、桁行の方向はE—31°—Sである。柱穴は一辺109～142cmの隅丸方形である。柱痕跡は直径20～32cmである。

建物の隅の部分でSA1620板塀跡と接続している。

SA1615一本柱列、SB1625建物跡を切り、SB1555・1560建物跡に切られている。

SA1615一本柱列（第107次・第14図）

調査区の北半でE—31°—S方向に延びる一本柱列を検出した。調査区の北壁際から3間延び、桁行5間、梁行2間のSB1625の北端に接続している。さらに建物の南端より3間延びている。検出した総長は建物跡も含め13.2mである。柱穴は66～92cmの隅丸方形で、柱痕跡は直径14～23cmである。柱間寸法は186～206cmである。

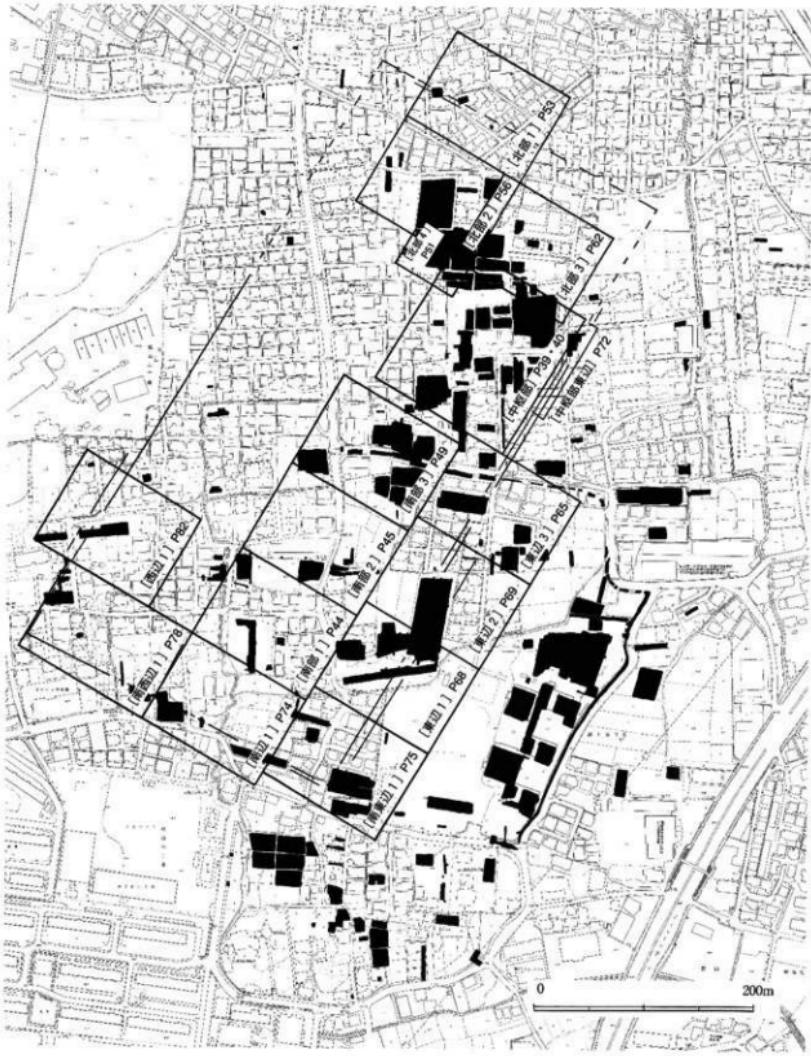
SA1620板塀跡、SB1610・1560・1555建物跡に切られている。

SA1620板塀跡（第107次・第14図）

調査区の北半でE—31°—S方向に延びる板塀跡を検出した。上幅44～61cm、底面幅32～40cm、深さ41～50cmの布堀の中に、幅（厚さ）5.4～6cm、長さ14～20cmの板材の痕跡が並んで検出されている。掘り方の断面形はU字形で、その中の中央よりやや北に寄って板材の痕跡が検出されている。板材の痕跡の間には、直径14～16cmの丸柱の痕跡が検出され、柱間寸法は224cmである。

この板塀跡はSB1610建物跡の隅の柱とSB1645門跡とを11.2mに渡って結んでいる。

SA1615一本柱列、SB1625建物跡を切っている。



第13図 1期官衙平面図（区割図）



第14図 I 期官衙中部

SB1625建物跡（第107次・第14図）

桁行5間、総長11.6m(柱間寸法193~258cm、平均224cm)、梁行2間、総長3.84m(柱間寸法192~205cm)の建物跡で、桁行の方向はE-31°-Sである。柱穴は一辺68~108cmの隅丸方形である。柱痕跡は直径14~21cmである。

建物の隅の部分でSA1615一本柱列と接続している。

SA1620板塀跡、SB1555・1610建物跡に切られている。

SA1740板堀跡（第115、122次・第14、15図）

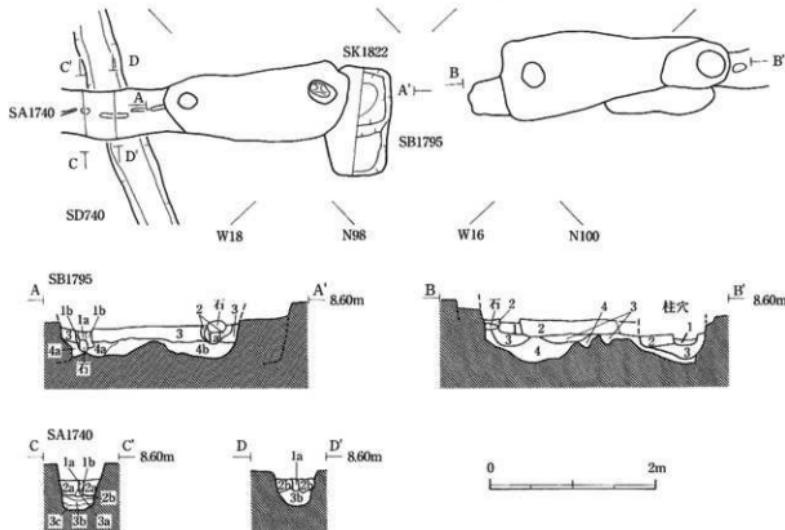
上幅50~74cm、底面幅23~28cm、深さ40~55cmの布壺の中に、幅(厚さ)3~7cm、長さ12~33cmの板材の痕跡がE-34°~S方向に並んで検出されている。掘り方の断面形はU字形または逆台形で、底面は平坦である。板材の痕跡の間には、一辺8~10cmの角材痕跡が検出され、柱間寸法は210cmである。

この板塀跡はⅠ期官衙のSB1760建物跡とSB1795門跡とを結んでいる。

SB1795門跡に切られている。

SB1795門跡（第115、122次・第14、15図）

長軸220～280cm、短軸76～100cmの椭円形を呈する掘り方が2基(北掘り方、南掘り方)あり、その中の西端か

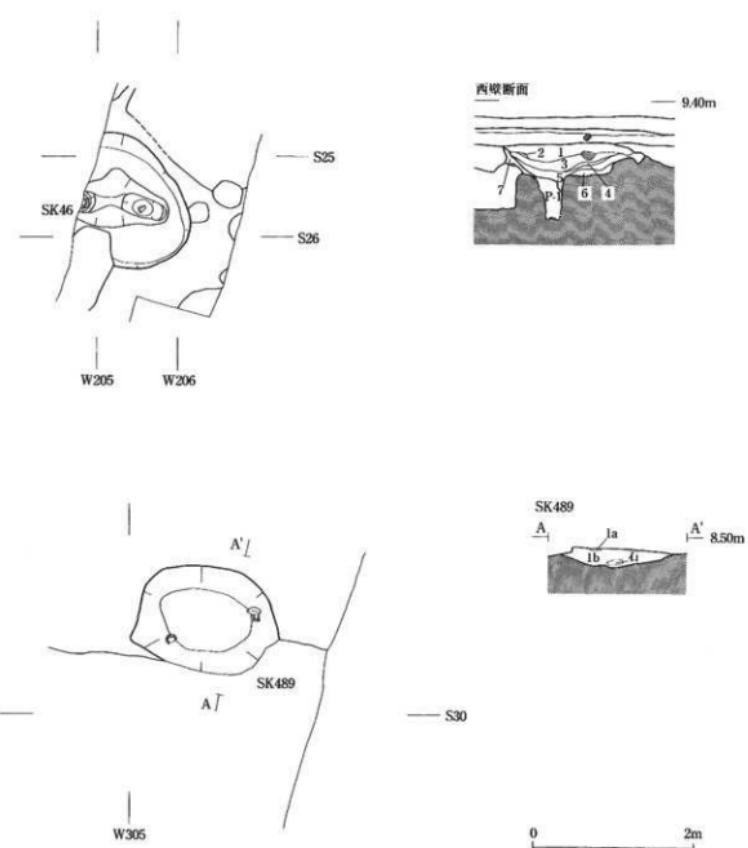


通巻名	原題	主色	主性	備考	通巻名	原題	主色	主性	備考
SB1796 (a) A-A'					SA1700	C-C'	D-D'		
1a	10YR4/3	にせい黄褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土粒を少量含む	1a	10YR4/4	褐色	シルト質粘土	
1b	10YR4/3	にせい黄褐色	シルト質粘土		1b	10YR6/3	にせい黄褐色	シルト質粘土	褐色土を含む
2	10YR5/2	茜褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒を少量含む	2a	10YR5/6	茜褐色	粘土質シルト	黄褐色土を含む
3	10YR2/3	暗褐色	粘土	黄褐色粘土粒、白粘土粒を含む	2b	10YR4/2	米黃褐色	シルト質粘土	黄褐色土を含む
4a	10YR4/1	暗褐色	粘土	白色粘土を多量に含む	2b	10YR3/2	黑色	粘土質シルト	黄褐色土を少量含む
4b	10YR7/3	にせい黃褐色	粘土	白色粘土、漂化粘土を多量に含む	2b	25Y5/4	黃褐色	シルト質シルト	黄褐色土を多量に含む
SB1795 (a) B-E'					3c	25Y5/4	黃褐色	粘土質シルト	黒褐色土を少量含む
柱供試	1	10YR2/2	黑褐色	粘土					
	2	10YR4/4	褐色	粘土	浅褐色粘土粒を含む				
	3	10YR4/1	暗褐色	粘土	白色粘土を多量に含む				
	4	10YR3/2	黑褐色	粘土	下層に白粘土粒を帶状に含む				
柱穴	1	10YR5/1	暗褐色	粘土	白色粘土、漂化粘土を多量に含む				
	2	10YR2/2	黑褐色	粘土	浅褐色粘土粒と漂化土に混じる				
	3	10YR5/1	暗褐色	粘土	白色粘土を少量含む				

第15図 SA1740、SB1795 平・断面図

ら直径22~32cmの柱痕跡が検出された。北掘り方の北端にのみ柱の重複があり、直径30cmの柱痕跡が検出されている。掘り方の距離は182cm、掘り方の中の柱痕跡間の距離は250cmである。

重複ではSA1740板塀跡を切っているが、位置関係からは板塀と連結して存在していたと考えられる。



遺構名	位相	上色	土性	備考	遺構名	位相	上色	土性	備考
SK46 (西壁)					Pit1		10YR5/6 黄褐色	粘土	表面堅硬のほか、底に遺物の付着
1	10YR5/3	にじい黄褐色	軽土質シルト	炭化物を少量含む	SK489	A-A'			
2	10YR4/3	にじい黄褐色	シルト質粘土	明瞭な色を呈状に含む		la	10YR3/4 暗褐色	シルト	
3	10YR5/3	にじい黄褐色	軽土質シルト	礫を含む		lb	10YR4/4 剥色	シルト	10YR4/6を霜降り状に含む
4	10YR4/4	にじい黄褐色	前土						
5	10YR5/15-L	剥灰色	シルト質粘土	人糞の他土塊及び炭化物を含む					
6	10YR4/2	褐色	シルト質粘土	炭化物を多量に含む、細砂を含む					
7	10YR5/3	にじい黄褐色	軽土質シルト						

第16図 SK46, SK489 平・断面図

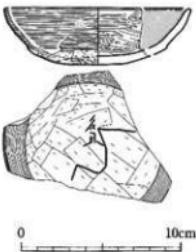
[I期官衙南部]

SK46土坑 (第4次・第16、21回)

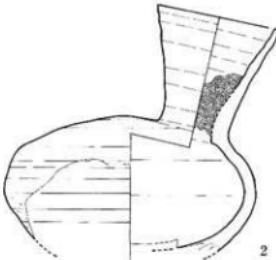
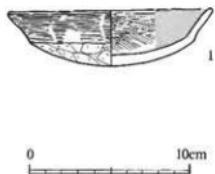
方四町II期官衙の外郭南辺材木列が掘り込まれた整地層の下層で発見された。平面形が165×130cm以上、深さが50~80cm程の土坑である。この土坑の底面から内面黒色処理された丸底の土師器C-28壺が出土した。このC-28壺は、器高が3.5cm、口径が11.4cmで、内面がヘラミガキの後に黒色処理され、外面部が底部と体部の段から上はヨコナデ、下はハラケズリが施されている。底部外面には焼成後に「名取」と線刻されている(写真図版647参照)。

SK489土坑 (第43次・第16、20回)

平面形が190×120cmの楕円形を呈する、深さ20~30cm程の土坑である。この土坑からは内面が黒色処理された丸底の土師器C-511壺(第18図1)と内面に漆が付着した須恵器E-225平瓶(第18図2)が出土した。



第17図 SK46 出土遺物



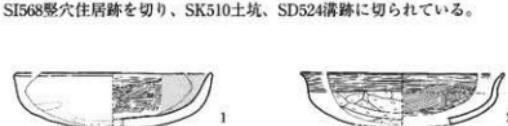
団塊 番号	登録 番号	種類	器形	出土地点 出土遺物 部位	法量 (cm)	外側調整	内側調整	備考	調査 大数	写真 回数
1	C-511	土師器	壺	SK489 1	器高3.5 口径12.8	口縁ヨコナデ、底部ハラケズリ	ヘラミガキ、黒色処理	A.I	43	702
2	E-225	須恵器	平瓶	SK489 1	瓶高15.1 口径7.9	口縁ヨコナデ、底部ヨコナデ・ハラケズリ	ロクロナデ	3-5回付着	43	702

第18図 SK489 出土遺物

SB507建物跡 (第44次・第25回)

桁行5間、総長10m(柱間寸法185~205cm)、梁行2間、総長4.5m(柱間寸法200~232cm)の建物跡で、桁行の方向はN=31°-Eである。柱穴は一辺60~115cmの長方形で、深さは50~70cm、柱痕跡は直径10~26cmである。

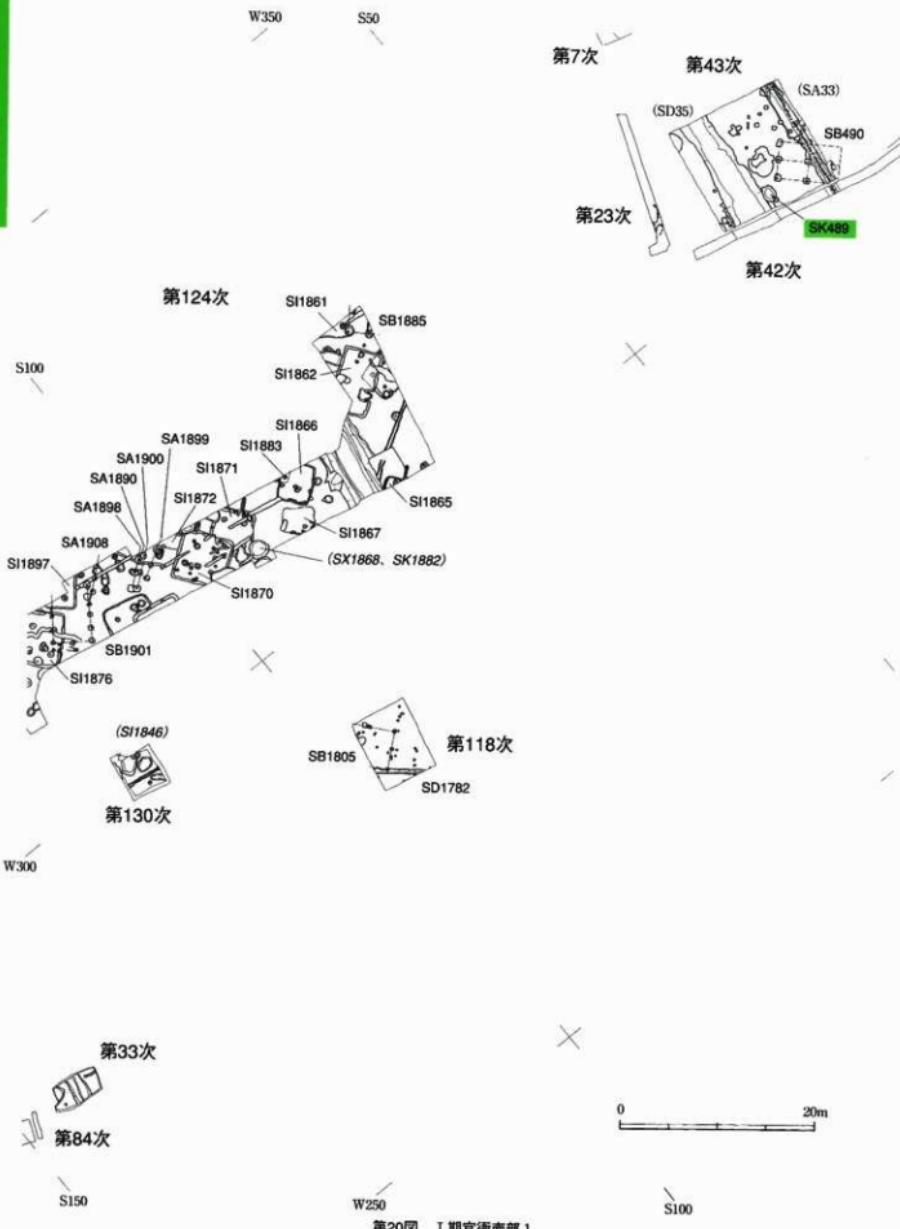
遺物は柱穴掘り方埋土から土師器C-515壺(第19図1)、口縁部内面が屈曲し赤彩された土師器C-544壺(第19図2)が出土している。



0 10cm

団塊 番号	登録 番号	種類	器形	出土地点 出土遺物 部位	法量 (cm)	外側調整	内側調整	備考	調査 大数	写真 回数
1	C-515	土師器	壺	SB507 EIN1	残存高3.4 口径(12.4)	口縁ヨコナデ	ヘラミガキ、黒色処理	A.N.Iai	44	706
2	C-544	土師器	壺	SB507 EIN2	残存高3.5 口径(12.4)	口縁ヨコナデ、底部ハラケズリ	ナデ、赤彩	C.III	41	706

第19図 SB507 出土遺物



N-S W300



N50

W250

第42次

第92次西



第92次東

西区

南区

第4次

北区

第85次A区

SB1279

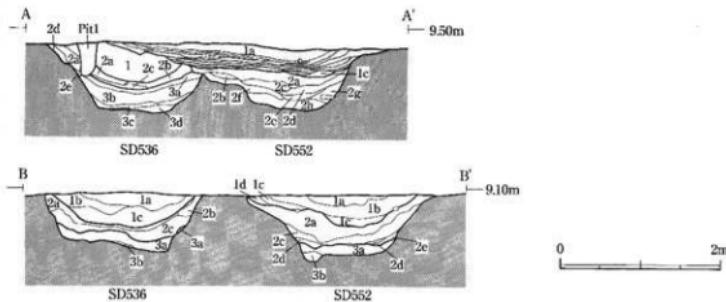


W200

0

20m

第21図 I期官衛南部 2



遺構名	層位	上色	土性	備考	遺構名	層位	上色	土性	備考
A-A' (110次)					B-B' (44次)				
SD536	1	10YR5-3 黄褐色	粘土質シルト		1a	10YR3-2 黑褐色	シルト		
	2a	10YR5-6 黄褐色	粘土質シルト		1b	10YR4-4 黄褐色	シルト		
	2b	10YR6-4 に赤い黄褐色	粘土質シルト		1c	10YR5-3 に赤い黄褐色	砂質シルト		
	2c	10YR5-2 灰褐色	粘土質シルト		2a	10YR3-1 黑褐色	粘土		
	2d	10YR5-4 に赤い黄褐色	シルト	酸化物を微量に含む	2b	10YR3-4 灰褐色	シルト		
Pit	3c	10YR4-4 黄褐色	粘土質シルト		2c	10YR4-2 灰褐色	粘土		
	3a	10YR4-2 灰褐色	粘土質シルト		3a	10YR5-2 灰褐色	粘土		
	3b	10YR4-2 灰褐色	粘土質シルト		3b	10YR5-2 黑褐色	粘土		
	3c	10YR6-4 に赤い黄褐色	粘土	酸化鉄斑を少許含む	1a	10YR3-3 灰褐色など	シルト		
	3d	10YR6-4 灰褐色	粘土	酸化鉄斑を多量に含む	1b	10YR3-4 灰褐色など	シルト		
	1	10YR4-3 に赤い黄褐色	粘土質シルト	黄褐色新土質シルトを含む	1c	10YR4-4 黄褐色	シルト		
	1a	10YR4-3 に赤い黄褐色	シルト	に赤い黄褐色と互層	1d	10YR3-4 灰褐色	シルト		
	1b	10YR7-2 に赤い黄褐色	シルト		2a	10YR3-2 黑褐色	粘土質シルト	に赤い黄褐色砂質シルトをプロ	
	1b'	10YR4-2 灰褐色	シルト		2c	10YR4-3 に赤い黄褐色	砂質シルト	ック状に酸化鉄を含む	
	1b'-1	10YR6-3 に赤い黄褐色	シルト	酸化物を多量に含む	2d	10YR4-4 黄褐色	粘土質シルト		
	1c	10YR4-2 灰褐色	シルト		2e	10YR4-3 に赤い黄褐色	粘土		
	2a	10YR5-2 灰褐色	シルト	3層に酸化鉄を含む	3a	10YR6-2 灰褐色	粘土	褐色粘土、酸化鉄を含む	
	2b	10YR4-2 灰褐色	シルト	酸化鉄、マンガン斑を多量に含む	3b	10YR6-3 灰褐色	粘土		
	2c	10YR5-2 灰褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む	3d	10YR6-3 灰褐色	粘土		
	2d	10YK3-2 黒褐色	粘土質シルト						
	2e	10YR5-2 灰褐色	粘土						
	2f	10YR4-2 灰褐色	粘土質シルト	黒褐色粘土を含む					
	2g	10YR4-2 灰褐色	粘土質シルト						
	2h	10YR6-2 灰褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む					

第22回 SD536・552 断面図

SD536溝跡（第44、110次・第25回）

長さ66m以上、上幅180~220cm、下幅69~160cm、深さ40~92cmの溝跡である。断面形は逆台形を呈し、底面は凹凸がある箇所(第44次)と平坦な箇所(第110次)とがある。方向はN-34°-Eである。

SD552溝跡に切られている。

SD552溝跡（第44、110次・第25回）

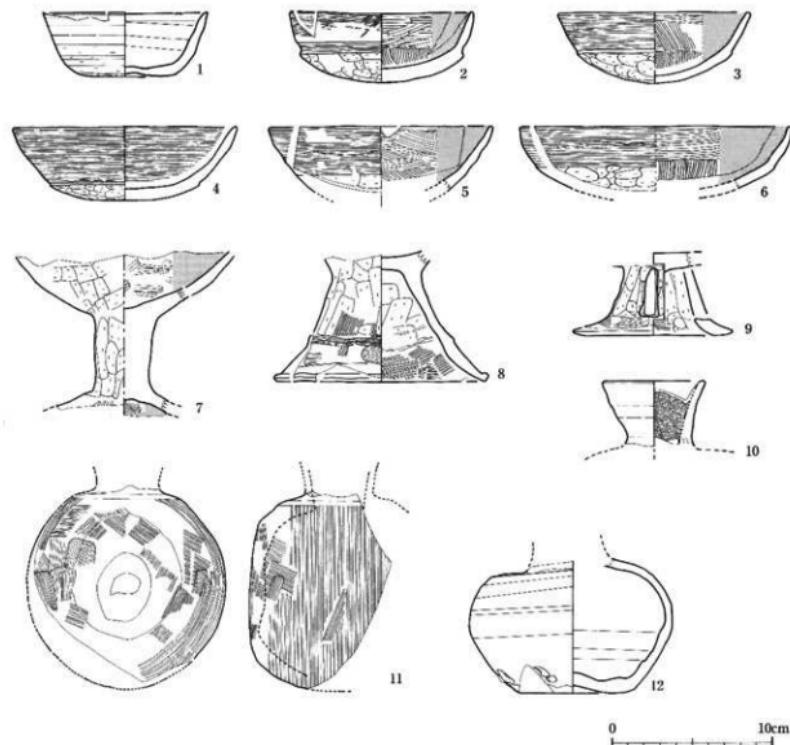
長さ66m以上、上幅180~360cm、下幅74~140cm、深さ50~80cmの溝跡である。断面形は逆台形を呈し、壁は土坑が重複するよう凹凸のある箇所(第44次)や緩やかな箇所(第110次)があり、底面は平坦である。方向はN-33°-Eである。堆積土中で上層が版築状に互層となり、丁寧な埋め戻しをされている箇所がある(第110次)。

遺物は第44次調査区で検出した溝跡内の第1層と第2層から多く出土している。第1層中からは、内面黒色処理され外側の体部と底部の境いの段が明瞭な土師器C-519杯(第23図2)やそれより段が不明瞭になり稜線となるC-522杯(第23図3)、それよりやや口径が大きくなる土師器C-523・524杯(第23図5、4)、扁平となるC-514杯(第23図6)が出土している。土師器C-524杯は内面がヨコナデ調整で、底面のみヘラミガキされているが、黒色処理はされていない。また高杯の脚部片も2点出土し、土師器C-539高杯(第23図9)は三方から台形型の透かしが穿たれている。C-540高杯(第23図8)の脚部には透かしがなく、ハケメの後にヘラケズリが施されている。須恵器では底部が手持ちヘラケズリされ、体部の外側に段や棱のない小形のE-233杯(第23図1)が出土している。他に内面

に漆の付いたE-231平瓶、E-229長頸壺、E-230提瓶(第23図10、12、11)の破片が出土している。第2層からは脚部が細い棒状となる土器器C-518高杯(第23図7)が出土している。

SD536溝跡を切り、全てのⅡ期官衛の遺構に切られている。

SD536溝跡とほぼ同じ位置で開削されており、中枢部の第107次調査区で検出されない状況からは、計画的な官衛の内部区画となっていたと考えられる。この溝跡を切るⅠ期官衛の遺構がないことや上層が極めて人為的に埋め戻されていることからは、Ⅰ期官衛の最終時期の遺構と考えられる。



国際番号	器種	種別	器形	出土地点	法量(cm)	外面調整	内面調整	備考	測定次数	写真枚数
1 E-231	灰土器	环	SD552	1 磁高4.0、口径10.2、底径4.6	口縁部-ロココナード-縫合部-ハタケゾリ、底部ハタケゾリ	口縁部底面ハタケゾリ、各部-先端ロクロナード	Ⅲ 1	44	702	
2 C-519	土器	环	SD552	3 磁高4.4、口径11.4	口縁部ヨコナード、底部ハタケゾリ	ハラミガキ、黑色處理	Ⅵ 2	44	703	
3 C-522	土器	环	SD552	1 磁高4.5、口径12.0	口縁部ヨコナード、底部ハタケゾリ	ハラミガキ、黑色處理	A B 2	44	703	
4 C-524	土器	环	SD552	1 磁高4.5、口径14.0	口縁部-ヨコナード-縫合部-ハタケゾリ	口縁部ヨコナード、底部ハタケゾリ	C V	44	703	
5 C-525	土器	环	SD552	1 磁高4.1、口径13.8	口縁部ヨコナード-ハタケゾリ	口縁部-体部へスジ模様、黑色處理	A B 2	44	703	
6 C-514	土器	环	SD552	1 磁高4.0、口径17.0	口縁部ヨコナード、縫合部ヨコナード-ハタケゾリ	口縁部-体部へスジ模様、黑色處理	A B 2	44	703	
7 C-518	土器	高杯	SD552	2 磁高2.2、底径3.3	9.8-縫合部ハタケゾリ、縫合部ハタケゾリ-ハタケゾリ	各部ハタケゾリ、黑色處理、縫合部ハタケゾリ、黑色處理	B 2	44	703	
8 C-540	土器	高杯	SD552	1 磁高2.5、底径3.0	縫合部ハタケゾリ-ハタケゾリ-縫合部ナメ	縫合部ナメ-ハタケゾリ、縫合部ハタケゾリ	Ⅲ 1	44	703	
9 C-539	土器	高杯	SD552	1 磁高2.5、底径3.0	縫合部ハタケゾリ、底部ナメ	底部ハタケゾリ、縫合部ハタケゾリ、縫合部ナメ	Ⅰ	44	703	
10 E-231	灰土器	平瓶	SD552	1 磁高4.0、口径9.4	口縁部ヨコナード	口縁部ヨコナード	漆付石	44	703	
11 E-230	灰土器	瓶	SD552	1 磁高4.2	縫合部ハタケゾリ-縫合部ハタケゾリ	縫合部-底部-ヨコナード	漆付石	44	703	
12 E-229	灰土器	长颈瓶	SD552	1 磁高2.8、底径7.5	N.S.NMハタケゾリ-縫合部ハタケゾリ	縫合部-底部ヨコナード-縫合部ハタケゾリ	光面滑石-漆付石	44	703	

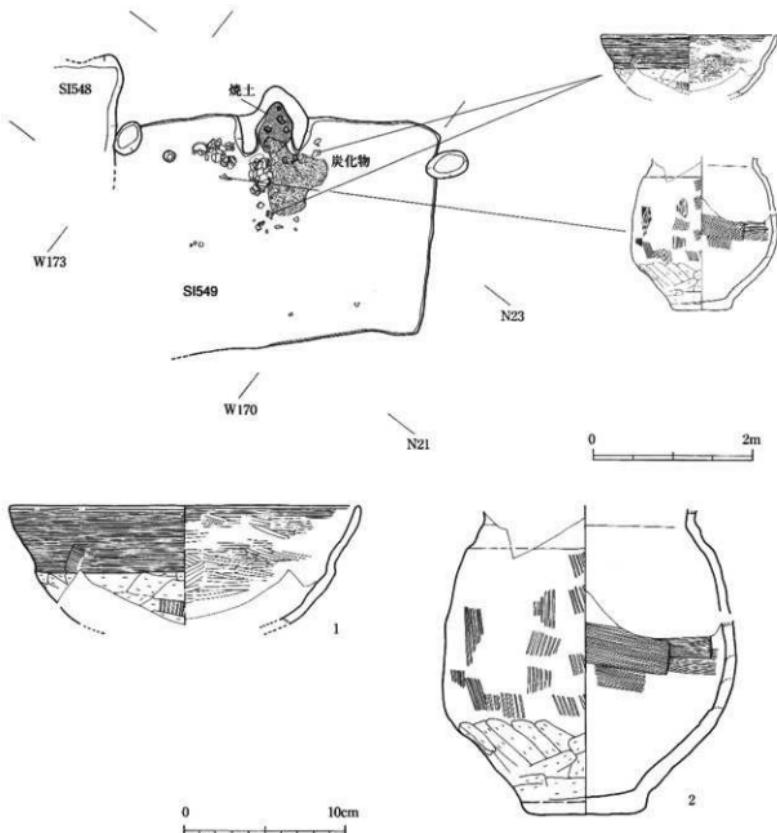
第23図 SD552 出土遺物

SI549竪穴住居跡（第44次・第24、25図）

東西4m以上、南北2.6mの長方形で、南東辺の壁の方向はN-36°-Eである。上部が削平されているため、一部床面が露出している。床面は黒褐色粘土質シルトによる貼床で、厚さは2~3cmである。周溝、主柱穴等は検出されなかった。カマドは北西辺にあり、その前面の床上には焼土ならびに炭化物が広がっていた。

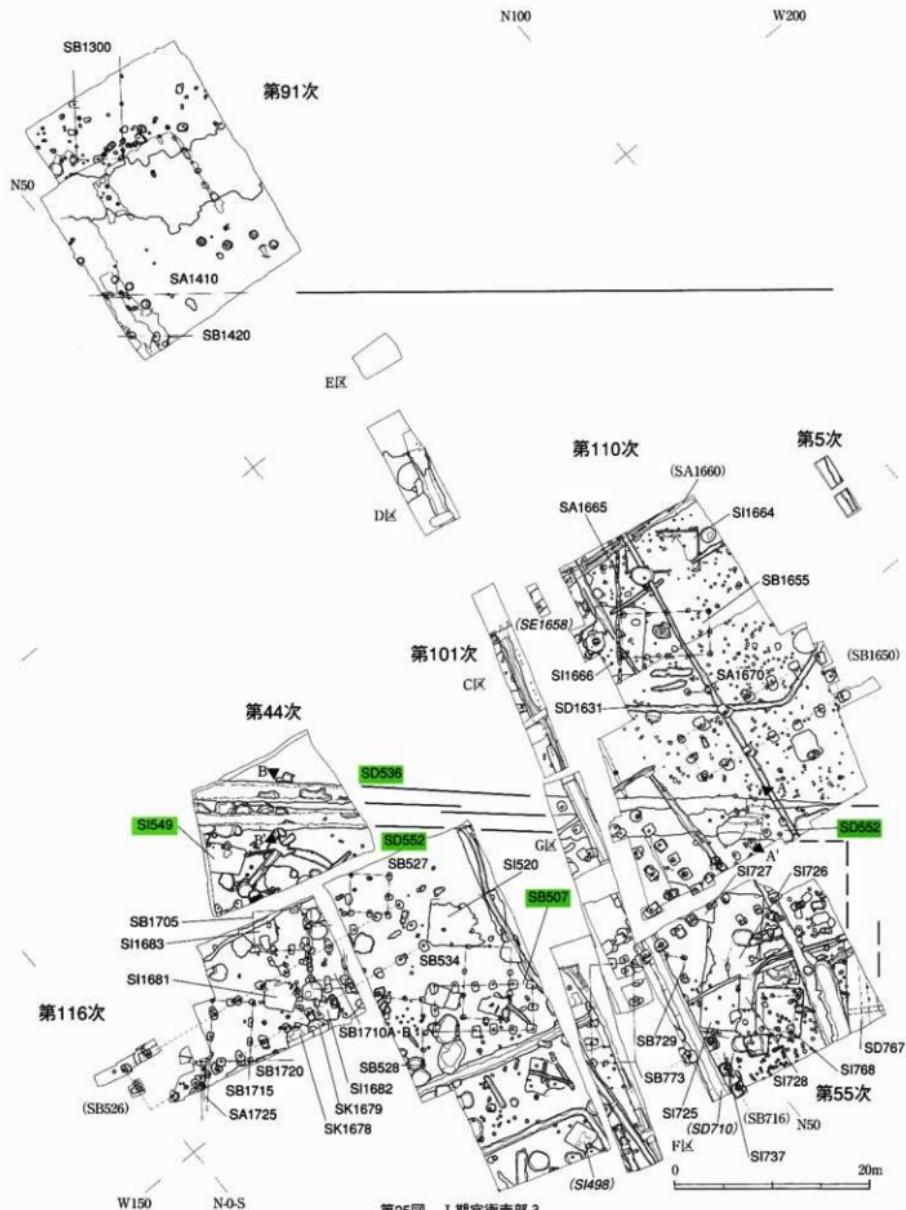
遺物は床面より大型で内面黒色処理された土師器C-525壺(第24図1)とハケメ調整の顯著な土師器C-534壺(第24図2)が出土している。

同じI期官衙のSI548竪穴住居跡に切られている。



実號 番号	空器 器種	種別	断面 部位	出土遺物 部位	法量 (cm)	外面調整	内面調整	備考	調査 件数	
									大数	回数
1 C-525	土師器	壺	SI549	床面	残存高7.4、口径21.8	門縫ヨコナギ、外部ハケメ→ハケズリ	山縫ヨコナギ、体部ハラミギ、黒色処理	I549a-A12	44	705
2 C-534	土師器	壺	SI549	床面	残存高19.1、底径7.7	体部ハケメ、底部ハラケズリ	底部・底部ハラナダ	B1	44	705

第24図 SI549 平面図・出土遺物



第25図 I期官衙南部3

[I期宮衙北部]

SI50堅穴住居跡（第6次・第28図）

小規模な調査で堅穴住居跡の一部を検出した。南壁とその内側に周溝が巡っている。壁の方向はE-33°-Sで第86次調査区のSI1294堅穴建物跡（形態は住居跡）と立ち並ぶ様相を呈している。床面上から小型の須恵器E-6短頸壺が出土している。

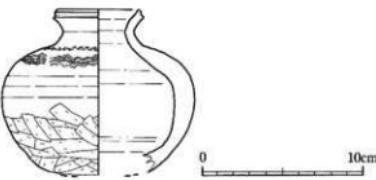
SI1294堅穴建物跡（第86次・第27、28図）

東西9.4m以上、南北4.8mの東西に長い長方形で、方向はE-33°-Sである。壁際には上幅10-30cm、深さ

17-19cmの周溝が巡っている。床貼までの深さは16cm以上である。床面上から炉跡が5箇所で検出され、さらに炭化物や鉄滓が集積している箇所がある。また床面上より多量の鍛造鋏片と粒状滓が出土しており、フイゴ羽口や鉄製品、鐵滓が付着した土器片などもあることから、鍛冶工房跡と考えられる。

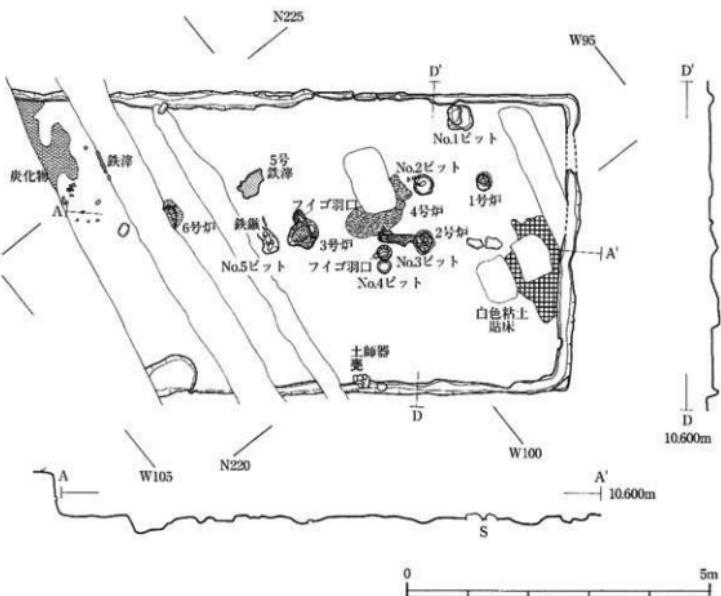
1号炉は長軸25cm、短軸18cmの楕円形で、壁面は還元し、さらにその周辺は酸化している。炉の内部より、土器片が出土している。またがの南側90cmのところに25×15cmの石が2個施設されており、炉に関連したものとみられる。

2号炉は長軸32cm、短軸25cmの楕円形で、深さは8cmで壁面は還元し、さらにその周辺は酸化している。炉の内部より、土器片、鉄滓（椀形滓）が出土している。炉から西に小溝状の落込みが統いており、フイゴの通風施設と



図版 番号	登錄 番号	種別	形	出土地點 測量番号	層位	法線 (cm)	写真 図版
E-6	須恵器			SI50	床面	残存高10.1、口径5.1	649

第26図 SI50 出土遺物



第27図 SI1294 平・断面図